

昭和51年5月9日第三種郵便物認可 昭和55年3月1日発行（毎月一回発行） ISSN 0385 - 5457

ヒマラヤ No.100

- 100号記念座談会「日本登山界とH A J」
- 1～100号総索引



1980 MAR.

日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN——HAJ

1980ヒマラヤ登山学校隊員募集

ケダルナート (6940m) 許可取得!!

HAJはこれまで1978年カシミール・ヒマラヤ・ヌン(7,135m)、ガルワール・ヒマラヤ トリスル(I峰7,120m、他)において登山学校遠征を実施し、多くの会員が頂上に立つなどめざましい成果をおさめてきました。

1980年遠征は、このほど解禁されたインドのガルワール・ヒマラヤ ガンゴトリ山群において実施します。ガンゴトリ山群は、これまで外国隊の入域が不可能であったところ。HAJはいち早く解禁の情報を得て、ケダルナート(6,940m)を申請し、許可を取得しました。

この登山学校遠征は、単なるパッケージ登山とは全く異なり、隊員全員が遠征の最初の段階から計画し、準備し、自らの手でタクティクスを組む

ものであり、遠征のすべてを体験することによって次へのステップとすることをねらっています。

もちろん、リーダーおよびインストラクターはHAJが経験ゆたかな人材を派遣いたします。

安全に、楽しく、そして全員登頂を原則とします。

日本を出発して帰るまで28日間によるヒマラヤの高峰登頂にチャレンジしてみませんか。

◇期 間 1980年9月14日～10月11日(28日間)

◇目 標 ケダルナート(6,940m)

◇負担金 1人650,000円。(個人装備を除いて、遠征に要する一切の経費を含む)

◇申込み HAJ事務局へ

◇定 員 20名(リーダー・インストラクター医師を含む)

表紙の言葉

依田孝喜

1954年の第2次マナスル登山隊は、山麓サマ村のチベット住民の妨害にあつて、転進を余儀なくされ、ガネシュ・ヒマールに向つた。写真はその時のベースキャンプ(トロゴンバ氷河4,000m)から見たガネシュ主峰の北面。もう26年も昔の姿だが、その峻嶒な山容は今とて少しも変わることはあるまい。

(よだ たかよし 日本山岳会会員)

ヒマラヤ No.100

1.	1980年、100号を迎えて――	柴田金之助
2.	ヒマラヤ放談――	野田衛
6.	ヒマラヤニュース<地域・文献・トピックス>	
8.	日本ヒマラヤ会議・予告	
10.	「ヒマラヤ」よはばたけ――	沖 允 人
11.	100号記念座談会 日本登山界とHAJ	
18.	HAJインフォメーション	
20.	連載 遠征学入門 ⑩――	西郡光昭
22.	未踏への誘い ⑩――	稲田定重
24.	V.エルウィン小伝 ⑥――	藤井毅
26.	事務局日誌	
27.	「ヒマラヤ」1～100総索引	

1980年、100号を迎えて

日本ヒマラヤ協会々長
柴田 金之助



会員の皆様明けましてお目出とうございます。

昭和55年新年に当り一言御挨拶申し上げます。

平素はH A Jの運営のために理事並びに会員の各位格別の御骨折御協力を賜り眞に辱く厚く御礼申し上げます。

御陰を以ちまして本会発足以来年々着実に歩を進めて参り本年度で14ケ年の経過を見、機関誌「ヒマラヤ」は100号を数えるに至りました。この間国内各地でのヒマラヤ集会では夫々多大の研修成果を収められ又会員夫々のグループが毎年海外遠征計画を打出されそして実行に移され見事にその目標を達成せられましてH A Jの海外遠征実績は面目躍如たるものがあります。

この様な年々のH A Jの計画及び実績が益々認識されまして現在では会員が800名を越す様な隆盛を見る様になりましたのは同慶の至りです。

そして又多年來の念願であります本会の法人化につきましては文部省の制定する諸條件に適う様資産の拡充を計り又東京事務所開設等歩一歩地固めをしまして本年こそは正式に法人として認下されるべく鋭意努力をして居ります。

また本年度の海外遠征計画も縦来には見られなかった様な大規模な計画が既に実行に移され着々と而も周到な準備が進められて居りますことは御承知の通りです。

以上多くの課題を抱えまして本年度を滑り出しましたH A Jの運営に対しましてより良き成果が挙げられます様会員各位一層の御協力を賜ります様一重に御願致しまして新年の御挨拶に代えさせて戴きます。

ヒマラヤ放談

1959年、あの世界を騒がせたチベット動乱のさ中、インド〜シッキムのルートで単身チベットに潜入した日本人記者がいた。しかもその直後、亡命中のダライ・ラマをシリグリでキャッチし、動乱勃発後初めて外人記者によるインタビューに成功。注目の記事を日本に送り込んできた。サンケイ新聞の野田衛（のだ・まもる）氏である。聞けば、シッキム、ブータン両王家と特別な懇意で、つい最近も、王女の結婚式に招かれて、シッキムに行ってきたばかりとのこと。今月は、その野田氏から知られざる動乱前夜のインド、シッキム秘話を中心に、かの地の興味ある話題を提供してもらった。

入国3日めで動乱勃発

—— チベットへ行かれたのは、いつ頃のことですか？

野田 1959年（昭和34年）、あのチベット動乱の年です。3月末から4月初め頃だった。

—— どういうことで行かれたんですか？

野田 シッキムのガントックへ行ったら動乱が起きて閉じ込められたんです。南へは下れないということで、インドに帰れない。それならこの機会に逆に北へ行って国境を越えてみようと思ってね。ナトク・ラを越えてチベットのヤトンに行ってきた。

—— シッキム自体、行くのは大変だったと思いますが……。しかも、そんな時代に。

野田 国王に招待されてたんですよ。もともとブータンへ行くつもりで出かけたんだけど、3月というのは時期が早すぎて、5月ぐらいのモンスーン前がちょうどいいんです。で、1カ月程暇があったから、シッキムへ寄ってみることにした。3月12日にガントックに入ったんだけど、3日めにして動乱勃発で動けなくなってしまった。それでヤトンへ行ったり、シッキム内をぶらぶらしたりしていた。

—— シッキムから入ってチベットをのぞいて



サンケイ新聞編集委員

野田 衛

くるなんて、すごい体験ですね。西川一三以来じゃないですか。

野田 古いことを言えば、多田さんとか鹿子木さんとか……。

—— 戦後はちょっといいでしょう。

野田 戦後はもう入れないでしょう。赤旗の記者が北から入ったことがありますね。

ブータン王妃のプレスガード

—— シッキム国王とはどうしてお知りあいになられたんですか？

野田 日本に遊びに来た時に知りあったんです。最初に知りあったのはシッキム王じゃなくて、まだ若い頃のブータン王妃です。今のブータンの王様がまだ4つぐらいだった。シッキム王家とブータン王家は姻戚関係にありますから。

—— それは何年頃のことですか？

野田 57年（昭和32年）です。香港までの了解を得てショッピングに来たんです。シッキムは当時インドの保護領で、その王妃一行ですから、むやみやたらと勝手には歩けない。で、香港の出先機関のOKを取り付けて日本まで足をのばしたんですね。

—— それをうまくキャッチしたわけですか。

野田 いや偶然ですよ。当時私は横浜で海事記

者をしていた。海事記者というのは、港から出入りする珍しい外国人を取材する仕事なんです。当時は飛行機のスピードが遅くて、空の旅があまり快適でなかったから、ちょっとした人はみんな船でやって来た。いろんな政治家が来たり、マロン・ブランドが来たり……。

—— そしてある日、ブータンの王妃もやって来たわけですね。

野田 そうです。たまたまその時私1人で取材に出かけた。ところが向こうはさっきも言ったように香港の出先機関のOKだけでこっそりやって来たわけですから、新聞種になるのを嫌がるんですよ。私も最初取材を断われたんです。でも、東京には競争紙がいっぱいありますからね。私が書かなくても、どうせそのうち他の新聞に書かれてしまいます。そこで考えた。「新聞社の取材攻撃からガードしてやろう」とね。つまり、プレスガードをひきうけたわけです。日本に11日ぐらいいましたが、その間私の方は適当な時間に抜け出して来ては見物の案内をしたり、ショッピングを手伝ったりしましたよ。

—— それですっかり仲良くなったわけですね。

野田 その時来日したのは、今のブータン国王の祖母とその姉なんです。ブータン王の祖母というのは、当時のシッキム王の妹です。ラニ・チュニ・ドルジといって、大変な女傑です。今のブータン王国をあそこまで仕立てたのは、殆んど彼女の功績といっていい。あとでわかったことだけど、大正時代にも一度来日してるんですよ。で、すっかり親しくなって帰ったんだけど、そしたらその翌年になって今度はシッキム国王が日本に来ることになった。もちろん、彼女が「よろしく頼みます」と知らせてきたわけで、またレセプションをしたり……。

—— それが1958年ですね。

野田 そうです。この王様がなかなかの酒呑みでね。我々の行くような安酒場にも気軽に出かけるともんだから、よく一緒に飲みに行きましたよ。そうこうしているうちに、「私の国にも遊びに来なさい」ということになった。まあ、そんなところが、私とブータン、シッキムとの最初のふれあいということですよ。



—— それ以前からもあの辺には興味をお持ちだったんでしょうね。

野田 ええ、それはおもしろい地域ですからね。

車中でダライ・ラマと会見

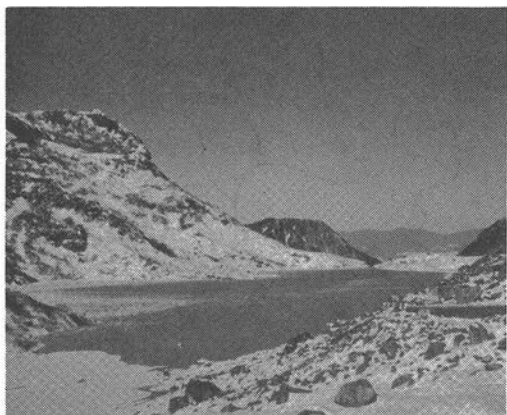
—— それでこっから出かけることになったのが、59年(昭和34年)ですね。

野田 そうです。まず行ってみて意外に開けていないと思いましたね。というのはシッキムへ行くのは初めてでも、シッキムの王家の人たちとは2年も前からつきあっていてたわけです。で、その人たちというのは、つきあってみると、人間として大変立派な人たちなんです。しかも、持っているインテリジェンスが大変高い。

—— なるほど。そういうものに長く接していたから、行く前からある程度の文化レベルの高さを予想されていたわけですね。

野田 高いだろうという先入感があった。ところが行ってみると、言語に絶する程の格差があるのにびっくりしてしまった。だけど、その格差に馴れてきてから、他の低開発国と比較してみると、遅れてる人たちのミニマムはむしろ高いと思いましたね。これは確かに言えることです。

—— インドからシッキムへは、だいたい今と



同じようなルートで入るわけですか。

野田 そうです。当時、シリグリの空港がただの川原みたいな所ですね。そこからシリグリの町まで歩いて行きました。シリグリで山へ入る準備をします。今のように公共の交通機関はないですから、公務の車に便乗するとか何らかの対策を構じなければなりません。私は個人の車をチャーターして、とりあえず、カリンボンまで入りました。

—— その頃はまだ動乱が起る前ですね。

野田 そうです。ただ、カリンボンにいた頃から様子はおかしかったですね。カリンボンというのは今でもそうですが、当時はもっと強烈に「東西の接点」として揺れ動いていました。そりゃもうスパイの巣窟という感じです。CIAの出先とか北京の出先とかいったのがウヨウヨしている。チベット人の中でも親北京派と反北京派がいて、それぞれが新聞を出して宣伝合戦をやっているような状況です。

—— マスコミ人としては、ちょうどいい時にいい所へ行ったということになるわけですね。

野田 普通はニューデリーからニュースを取るわけだから、かなり動乱に近い所にいたことにはなりますね。あの時、ダライ・ラマが行方不明になって、皆が捜していた。インドに入ったということがわかってから、世界中の記者がインタビューしようとして追跡したけど、なかなかつかまらない。そんな時にたまたま私がダライ・ラマと会ってしまったんです。これはシッキムから帰ってきてからのことですね。

—— どこで会われたんですか？

野田 シリグリです。汽車の中で会ったんです。

—— ダライ・ラマは簡単に会ってくれたんですか？

野田 簡単じゃあないです。ただ、私はシッキムの王子と一緒にだったから、その随行員という立場で会ったんです。偶然のタイミングでしたね。亡命してから外国の記者と会ったのは、私が最初でしょう。

—— あの時期にダライ・ラマをダイレクトにインタビューしたというのは、大変なことですね。生の声が世界に先がけて日本に入ってきたわけですね。

野田 あれからですよ。皆がワァーッと騒ぎ出したのは。

ナトゥ・ラからヤトンへ

—— その時のダライ・ラマ一行というのは、かなりの人数だったんですね。

野田 ええ、多勢いました。

—— ダライ・ラマの財宝というのは、どうなつたんでしょうか。

野田 ダライ・ラマの亡命は51年に続いて2度めですからね。その間にダライ・ラマだけじゃなくて、チベットの特権階級の財産はインドへ流れていましたよ。そのルートに、ナトゥ・ラ越えの道が使われていたらしい。

—— ダライ・ラマに会う前にそのナトゥ・ラを越えてチベットに入ったわけですね。

野田 ええ、ヤトンへ行きました。国境から20マイルぐらいですから、ほんのわずかですけど。

—— ヤトンのあたりというのは、砂漠のようなものですか？

野田 まあ、荒地ですね。

—— ラダックのような……。

野田 いや、木はありますよ。谷は広大です。ヤトンの町は何処にでもあるようなバザールですね。ただ、私が行った時は、もう住人はみんな逃げちゃった後で、ゴースタウンだった。カンパのゲリラが住んでるくらいだね。

—— ナトゥ・ラからはたくさん山が見えるんですか？

野田 いや、展望はそんなに効かないです。峠自体は「なんだ、こんなもんか」というような所

ですよ。国境のチョルテンが、ぽつんとひとつ建っているだけでね。あたりは雪に被われて、荒涼としていました。峠の手前に小さな湖があって、このあたりはいいですね。結氷湖で、夏でも半分くらいしか溶けない。

—— そのあたりで標高はどのくらいですか？

野田 私の高度計で4,200だった。ナトゥ・ラが4,300 ちょっとでしょう。湖のさらに手前に、「バンドラ・マイル」という所があって、つまりネパール語の15マイルですね。距離が地名になっちゃってるんだけど、ここに駅舎があって、そこまでは車で入れます。昔は峠を越えて向うまで道路が通じてたんだけど、戦後になって壊しちゃったんですね。

—— その後もシッキムに入られてますが、あとどんな所に行かれました？

野田 マンガンからラチェンの奥とか、あとラチェンにも行きました。

—— マンガンからラチェンを通してチベットへ向う道というのは、戦前に英国のエベレスト隊が使ったルートですね。

野田 そうです。

アンチ・インドの動向

—— シッキム人の生活様式というのは、どんなものなんですか？

野田 人種によって職業が違いますね。レプチャは完全な農耕民族です。チベット人は運輸業とでもいうのですか、馬方とかいった連中ですね。彼らは百姓はやりません。というのは、チベットで農耕に携わるのは農奴なんですよ。シッキムに来たチベット人に農奴はいないんです。

—— チベット人とレプチャ人はすぐ見分けがつきますか？

野田 そりゃもうぜんぜん違う。チベット人のほうが体格もいいし、世にたけている。レプチャは素朴で、古いタイプの農民です。

—— シッキムには、ネパール人もかなり住みついているんでしょう？

野田 ネパール人の進出は、シッキムの歴史を変えた大きな要因といえますよ。もともとのシッキムの土着民というのはレプチャなんだけど、こ

こへ17世紀頃にチベット人が入ってきて土着した。この「チベット系シッキム人」が、今の王家です。この王家は、レプチャの農耕経済の上に成り立っていたんです。ところが、ネパールやベンガリの進出が、このパターンを崩してしまった。彼らはレプチャより文化レベルが高いし、農耕技術もはるかに上まわっている。そこで新しい土地をどんどん開墾して、経済力を拡大していった。今や南部の土着は殆どネパールといっている。この勢力が王制打倒の大きな推進力となったんです。もちろん、インドの後押しがあつてのことですけどね。インドはインドで、周辺諸国に対する大国主義と対中国関係を優利にするために、この勢力をうまく利用したともいえます。

—— なるほど、75年(昭和50年)のインドのシッキム合併のパターンがそのあたりにあるわけですね。それで、今後の動きはどうですか？アンチインドの巻き返しはないですか？

野田 この前の州選挙ではネパール系が大敗しました。ただ、そのアンチインド、アンチネパールが、どういう方向へ行くかという、これは一概には言えません。インドは、選挙の結果を王制復古に結びつけて、恐れたようですが、私はそれはあまりないんじゃないかと思います。というのは、今のレプチャのインテリには、インド支配に反対だが、王制にも反対という思想が多いんです。これはきわめて教科書的なデモクラシーで、実は旧国王自身の思想なんです。また王妃(アメリカ人)がアンチインドの急先鋒でもあり、このあたりの影響が強いですね。

—— 王家は現在、政治的権限を多少でも持っているんですか？

野田 公的に認められた政治的権利はないです。経済力はありますがね。あと、プリンスとかいう尊称は慣例として残っています。まあ、これからどうなるかというのは、私にもよくわかりませんよ。

—— シッキムやブータンには、これからまだまだ行きたいですか？

野田 行きたいですねえ。おもしろいし、それに20年もつきあっていたら、もうシガラミにとりつかれたようなものですよ(笑)。

—— どうもありがとうございました。

(インタビュー構成 角田不二)

地域 ニュース

《中国・ネパール》

マナサロワールへの巡礼

1979年からネパール人巡礼者に限って外国人のマナサロワール湖への巡礼が許可されている。

言うまでもなくマナサロワール湖は聖山カイラスを写すヒンズー最大の聖地である。

許可されたといってもそこは重要な辺境に位置しているため厳しい制限付きである。

巡礼者達は、インド・ネパール・中国の3国が接するリブ・レク付近から密閉されたホロ付トラックに押しこめられ、周囲をうかがうことはできない。もちろん周りは中国軍によって監視されているらしい。

着いた湖では、わづか1時間の滞在が許されるのみで、巡礼者達はあわただしく祈り、沐浴を済ませる。

なお、インド人には許可されていないが、中国外務省高官筋によれば慎重に検討されているという。このことはインド側でも再三にわたり要請を行なっている。

チベットとネパールの話し合い

昨年、ネパール政府の高官がBeijingを訪れ、①カトマンズ — ラサ道路およびラサ — 中国鉄道を国外貿易のため使用すること ②チベットを経て中国への外国人観光客侵入等について話合ったといわれる。

1978年ネパールの観光客は156,123人

観光省の発表によれば78年中にネパールを訪れた外国人は次のとおりとなっている。これは前年比32.25%増である。

なお、79年1月～6月の訪問者は75,182人で、前年を3,000人余上回っている。

インド(30,487人、19.5%)、USA(20,504人、13.1%)、フランス(15,432人、9.9%)、西ドイツ(12,908人、8.3%)、イギリス(10,

602人、6.8%)、日本(10,478人、6.7%)、オーストラリア(7,460人、4.8%)、イタリア(7,205人、4.6%)

トータルでヨーロッパ諸国が43.8%、アジア諸国が33.6%となっている。

《インド》

カシミールに登山学校

インドは、カシミールに登山学校を開設すべく計画中で、今年度開校をめざしている。

本年早々にIMF総裁H・C・サリーン氏らのスタッフが学校敷地の適地選定等に助言を与えるためカシミールを訪れる。

カシミール州政府観光局は近年登山にひじょうに力を入れており、昨年は20余隊のインド隊をはじめ多くの外国隊が入っている。

アクシデント発生に備えて全隊がワイヤレスセットをたづさえスリナガールのコントロールルームと連絡がとられている。観光局ではそのために高出力の無線機を備えている。

遭難救助委員会は、警察・観光局・陸軍・空軍から編成され、救助活動用ヘリコプターを用意している。

新刊図書一覧

- ①アブドゥルワッハブ・ブーディバ著／伏見楚代子・美観橋一郎共訳、「イスラム社会の性と風俗」、桃源社、1980・1、278p、1,800円。
- ②水野清一・長広敏雄訳、「龍門石窟の研究」、同朋舎、1979・、全三巻、揃価28,000円。
- ③名取洋之助、「麦積山石窟」、岩波書店、1979・12、136p、4,800円。
- ④並河亮・並河萬里、「バーミヤンの鳩笛 — セントラル・シルクロード —」、玉川大学出版部、1979・12、190p、950円。(玉川選書115)
- ⑤奈良康明、「仏教史・I(インド・東南アジア)」、山川出版社、1979・12、504p+34p、1,900円、(世界宗教史叢書・第七巻)。
- ⑥マヘンドラ・グプタ著、奈良毅・田中 玉訳、「大聖ラーマクリシュナ — 不滅の言葉」、三学

出版、1980・1、188p、870円。

⑦吉田喜久治、「山が山であったころの山登りの話」、木耳社、1979・12、467p、3,800円。

⑧村井葵、「高峰への挑戦——高所における自己管理技術——」、岳(ヌブリ)書房、1979・12、225p、1,500円。

⑨深井聡男、「インドを歩く——三千世界の旅ガイド」、ゆう出版局・発行/中和印刷出版部・発売、1979・12、319p、1,200円。

⑩第14世ダライ・ラマ/菅沼晃訳、「大乘仏教入門」、蒼洋社・発行/英潮社・発売、1980・1、270p、4,000円。

⑪ジェイムズ・オールドリッジ著/中村妙子・訳、「タチ——はるかなるモンゴルをめざして——」、評論社、1978・6、222p、980円、(児童書)。

⑫松濤誠達、「ウバニシャッドの哲人」、講談社、1980・1、399p+4p、1,500円、(人類の知的遺産・第2巻)。

⑬ツルティムケサン・著/新井慧誉・訳、「チベットの学問文庫」、1979・、A5、80p、1,500円、(寿徳寺文庫)。

⑭大坪義光、「シルクロード放浪記」、冬樹社、1980・1、250p、980円。

⑮中島正、「ビルマ鎮魂歌」、中央公論事業出版・製作/丸ノ内出版・発行、1980・1、300p、2,000円。

⑯Waddel, L.A.: Among the Himalayas, rept., Calcutta, K.P. Bagchi, 1979, xvi+425p, 4maps, Rs.120/—。

⑰Allen, B.C. & : Gazetteer of Bengal and North-East India, rept., Calcutta, K.P. Bagchi, 1979, 705p, map, Rs.250/—。

⑱Mackenzie, Alexander.: The North-East Frontier of India, 1st ed. 1884, rept., Calcutta, K.P. Bagchi, 1979, 605p, map, Rs.180/—。

⑲Pemberton, R.B.: Eastern Frontier of India 1st ed. 1835, rept., Calcutta, K.P. Bagchi, 1979, 19 tables, xx+355p, Rs.90/—。

⑳Stein, Aurel., Sir: Serindia in 5 vols.,

(1st ed. 1921), rept., Delhi, Motilal Banarsidas, 1980.

刊行予定 vol. I—III 1980年春,
vol. IV—V 1980年秋。

日本円で組価120,000円程。

トピックス

カンチ隊幕岩に登る(合宿)

79年12月29日～80年1月3日にかけて、カンチェンジュンガ隊は、北ア・唐沢岳幕岩にて合宿を行なった。15名の隊員が参加し、3パーティに別れて下記のルートに登はんし、終了後は幕岩尾根を登りつめ、唐沢岳頂上を踏み、北尾根～C沢を下降した。下山後は茅野の清水隊長宅へ参集し、2日夜～3日にかけてミーティングを行ない、3日昼解散した。

《登はんルート》

④右稜 清水澄、山森欣一、八木原罔明、今野一也、保坂昭憲(12/30～31)

⑤山嶺第二ルート 山田昇、藤倉和美、若尾巻広、小松伸、福山茂(12/30～1/1)

⑥明峰ルート 尾形好雄、八嶋寛、角田不二、谷岡俊匡、二階義治(12/30～1/1)

※④は冬期第二登、⑥は冬期第三登。

セミナートレッキング隊帰国

年末より派遣していたHAJセミナートレッキング隊(岩水竜峰隊長、五百沢智也講師ら21名)は無事活動を終え、さる1月16日(水)18名が帰国した。途中、高度障害にかかって倒れる隊員も出たが、無事救出され他隊員とともに帰国した。

詳しくは11ページの「速報」を参照のこと。なお次号にて「特集」としてさらに詳しく報告します。

日本ヒマラヤ会議・予告

この会議は、日本山岳協会をはじめとする関係諸団体との提携のもとに、全国を広くカバーして多くのヒマラヤ志願者に向けて行う研究集会です。

情報過多ともいえる中であって、一面では後退現象も見られる最近のヒマラヤですが、この会議は遠征とその周辺に関して多角的に考究し、最新で正確な情報を提供するとともに、基礎的な面を重視した内容で開催いたします。

今年は第1年度ですが、今後開催箇所数を増やし、内容を充実して行くつもりですので会員内外多数の参加を期待します。

京都会場 2月24日(日) 9.30～17.00

＜場所＞ 京都府青年会館

＜日程＞

9.00～9.30 受付

9.45 開会・参加者紹介

10.00～12.00 地域研究（最新事情・記録・他） インド・ヒマラヤ 稲田定重（HAJ専務理事）

12.00～12.30 昼食

12.30～14.00 同ネパール・ヒマラヤ 小松幸三（カモンカ同人ダウラギリ縦走登山隊副隊長）

14.00～15.30 同カラコルム・ヒンズークシュ 講師交渉中

15.30～17.00 ヒマラヤ登山における遭難解析とその防止 山森欣一（HAJ事務局長 1980カンチェンジュンガ偵察隊々長）

17.00 閉会

＜参加＞

この会議の趣旨に関心を有する者で、所属・経験等を問わない。（60名）

参加費：2,000円（資料費・他を含む）

参加申込み：

※終了後HAJ会員による集会を開催します。

札幌会場 3月9日(日) 9.30～17.00

＜場所＞ 日本中央競馬会札幌場外センター

＜日程＞

9.00～9.30 受付

9.45 開会・参加者紹介

10.00～12.00 地域研究（最新事情・記録・他） インド・ヒマラヤ 稲田定重（HAJ専務理事）

12.00～13.00 昼食

13.00～15.00 同、共産圏の山々 田村俊介（日山協海外常任委員）

15.00～17.00 同、カラコルム・ヒンズークシュ 広島三朗（日山協海外登山委員長）

17.00 閉会

＜参加＞

この会議の趣旨に関心を有する者で、所属・経験等を問わない。（50人を定員とします）

参加費：1,500円（資料費・他）

申込み：

インド・ヒマラヤ遠征情報交換会

ライトエクスペディションを中心として、インド・ヒマラヤにおける登山は近年ひじょうな隆盛を示しつつあり、本年はガンゴトリ山群の解禁も手伝って日本から10数隊の申請が出されています。

しかしながら、毎年少なからぬトラブルが発生しているのがインド・ヒマラヤにおける登山であります。また、多くの隊が出ていながら日本隊間の連携は殆んどなされていない状況です。

この交換会は、計画各隊及びこの地域に関心を有する者が一堂に会し、お互いに持てる情報を交流し、また連携について話し合い、遠征がよりスムーズに行われることを目的として開催するものです。

《主催》 日本ヒマラヤ協会（H A J）

《後援》 日本勤労者山岳連盟

《日時》 1980年3月16日（日）10時～16時

《場所》 日本ヒマラヤ協会ルーム（東京都新宿区高田馬場3-23-1

下車7分）

《日程》

10.00 開会・参加者紹介

10.15～12.00 各隊計画概要発表

12.00～12.30 昼食

12.30～14.30 インド・ヒマラヤにおける登山事情（通関・輸送・渉外その他アプローチ事情、スライドーガンゴトリ）

14.30～16.00 懇談会（情報交換及び協力の可能性等）

16.00 閉会

《参加》

会費：1,500円（資料・昼食費等含む）

申し込み：1980年2月29日まで下記へ。25名を定員とします。

〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル新館506

日本ヒマラヤ協会
（10.00～18.00）

広島集会の御案内

～2月23日（土）～

中国・四国地区のH A J会員を対象に地域会員集会を下記により行います。

ガンゴトリ地域を中心とする最新のインド・ヒマラヤ情勢、ネパール事情、カラコルムについて勉強する良い機会ですので多数の参加を希望します。

《日時》 1980年2月23日（土）13時～17時

《場所》 RCC文化センター 広島市橋本町5-

11 TEL 0822-22-2277

《日程》 13.30 開会・参加者紹介

13.30～15.30 地域事情（スライド含む）

①インド・ヒマラヤ

②ネパール・ヒマラヤ

15.30～17.00 カラコルムの研究法

17.00 閉会

※集会終了後、会場を移してH A J会員懇談会を開催します。

《申し込み》

※会費：飲物代として500円（当日）

※講師：稲田専務理事・他

「ヒマラヤ」よはばたけ

沖 允人

よい雑誌ができるためにはよい原稿がなければならぬが、立派な原稿があったからといってすばらしい雑誌が編集できる訳でもない。材料さえよければうまい料理ができるという具合にいかないのと同じことである。しかし、天才ででもない限り、悪質な材料ですばらしい料理を作ることは至難である。良い執筆者とすぐれた編集者によってよい雑誌ができるのが通常である。

編集者は自分の才能と意欲のすべてを雑誌の意図するものにぶっつけてこそ、編集という苦味が味わえる。そのためには、まずその雑誌を編集することが面白くなければならぬ。

特に「ヒマラヤ」のような非営利の雑誌であれば、それだけ、このことの重みは大きい。編集者が、多大な時間を無報酬で費した結果の唯一の喜びは、自分の思うような雑誌ができあがることだけだからである。

「ヒマラヤ」の前身である「ヒマラヤ通信」は第19号まで発行された。第20号から「ヒマラヤ」にかわり、大きさもそれまでの倍になった。第1号は1968年4月であるから、今から12年ほど前のことである。

当時は、事務所は東京の渋谷区神宮前、大阪府池田市、名古屋昭和区にあった。会員は少なかったが、ヒマラヤ・トレッキングという言葉もまだ一般的でなかったころであった。それだけに会員の熱意は強かった。HAJの夢も、ジェット機をチャーターしてのヒマラヤの旅、エベレスト山麓のホテル建設、ヒマラヤ諸国の人と的人物交流と幅広く大きかった。そして、これらの夢は数年のうちにそれぞれに実現していった。

名古屋で開かれるその頃の総会には全国各地から会員が集まった。藤江幾太郎（東京）、高沢忠（高槻）、橋本広（富山）、矢野郁雄（京都）、前田清（大阪）、勝山良三（長崎）の方々は毎回のように出席された。

「ヒマラヤ通信」は、このような会の雰囲気によ

く反映していて、数ページの文字通りの小冊子であったが、充実していた。第17号の深田久弥追悼特集も含めて第19号までの通ページは578ページであった。

自分が面白いからやる。これが、趣味の原点であるが、やっているうちに面白さにくい違いがおきたり、自分だけが面白がっていて気がついてみると自分のうしろに誰もいなかったという事もおこり得る。自分が面白いと思うことはそう簡単に変わるものではない。それはその人の特性とどこかでしっかりとつながっているからである。だから、自分の面白くことが他の人には面白くないということになった場合は、それらの人と袂を分つこと以外に自分を生かす道はないであろう。

「ヒマラヤ」の編集と発行に喜びを感じられるのは、会員の望むところと会の力とが共鳴し、編集者を軸にして一大ハーモニーが形成されることにあろう。今のところ多くの会員にとって「ヒマラヤ」のみが、HAJとのきずなであるからである。

このように、動いていけなくなったときは、編集者、ひいては会の中核メンバーの交替を考えなければならない。あるいは会の解散も検討する時期であろう。義理や義務感には限度がある。編集そのものの楽しみ、発行までこぎつけ発送し終ったホットした安らぎなどだけでは「ヒマラヤ」の編集発行の重荷に耐えていけない。

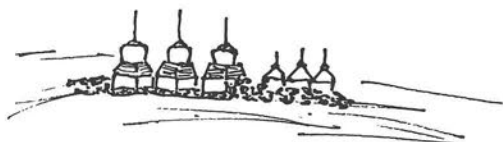
HAJは新たな発展を求めて動き出した。新しいHAJに対して私自身の資質と興味を問うたとき、答えはノウであった。そして「ヒマラヤ」の編集に興味を失なった。

「ヒマラヤ」は私の手を抜けて、新しい世界へはばたいていっている。そして100号をむかえる。「ヒマラヤ」は「私の」「ヒマラヤ」ではなくなったが、「ヒマラヤ」のHAJへの重みは以前にも増して大きく、私も含めて、会員の「ヒマラヤ」への期待はさらに大きい。

（おきまさと 本誌前編集長）

速報！ セミナートレッキング

H A J ジュガール山群踏査隊



隊長 岩水 竜峰

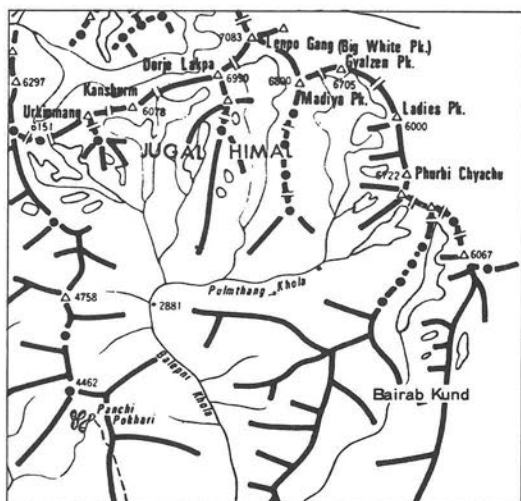
昨年末から今年にかけて、H A J 野外活動及び関連学術委員会下において実施されたセミナー・トレッキングは、12月30日成田を出発し、1月16日成田に全員帰国を持って終了いたしました。この間お寄せいただきました各位のご援助に対し誌上をもって厚く御礼申し上げます。

昨年の総会において承認、講師に氷河学の権威五百沢智也氏を迎え、隊員を決定し、9月に富士山において合宿、その後多少の隊員の変動があったものの、16名が30日成田をA I 3 0 1で出発した。順調にいけば31日の深夜デリーに着く予定であったが、深い眠りからさめてみるとボンベイであった。霧のためデリーへの着陸は不可能であつたらしい。すったもんだのあけく、やっとボーディングカードを手に入れてデリーに飛んだ。それもファーストクラスのおまけつきであった。禍い転じて福となるとはこんなことだろうか。デリー・カトマンズ(K・T・M)間は11席しかなく5名をデリーに残してのK・T・M入りで、ハプニングの連続であったが、菊地氏やランチャン氏の出迎えを受けた時、やっと、気持ちがなごむ思いであった。残り5名も翌日K・T・M入りし、翌々朝(1月2日)早朝K・T・Mをあとに国境の町コダリへむけて出発、途中ドウリケルでヒマラヤの展望を楽しみ、五百沢先生より説明を受け楽しい第1歩を印した。こうして1月12日まで11日間、コダリ→ラルチュ→チレンタン→ゴンベダンダ→バイラブクンド→テレンタン→バガン→ガテョ→ジャルビル→チョータレのコースをと

ってK・T・Mに帰ったのである。途中高山病で下山又当初予定したバイラバクンド越えは、雪のため出来なかったものの、日本人として始めて歩いたコースも多く楽しいセミナートレッキングとなった。

今年はことのほか雪が多く、我々も4日間雪の中での生活であったが、ポーターのトラブルもなく、食事もすばらしく、楽しい山行となった。これもひとえにランチャン氏・菊地氏・片岡氏(カンチ隊員)それにサーダーのパサン・ソナム氏らの協力の賜であった。

以上とりあえず速報として、会員諸諸にたいしご報告いたします。(1月22日)



五百沢智也著「ヒマラヤトレッキング」山と溪谷社より

日本登山界とHAJ

出席者 池田常道（「岩と雪」編集長）
遠藤 登（東京都山岳連盟副会長）
広島三朗（日本山岳協会海外登山委員長）
森田千里（日本勤労者山岳連盟海外登山委員長）
稲田定重（HAJ専務理事）
・司会 山森欣一（HAJ事務局長）

・時代を先取りしたが……

山森 本日はHAJが登山界で果たして来た役割や今後どのような役割を期待するかということでお話し合いをしていただきたいと存じます。始めに専務理事からHAJ設立のいきさつと推移を話してもらいます。

稲田 HAJが設立されたのは1967年です。当時は、ネパールヒマラヤは登山禁止となっておりまして、外貨枠の規制が緩和されたばかりで、一般の人がヒマラヤはおろか海外へ出ることですら容易ではなかったわけですが、ネパールを訪問した柴田会長がその景観の素晴らしさに感動し、「少しでも多くの人にヒマラヤ（当時はネパール）を見てもらいたい、そして日本とネパールの親善のかけ橋になろう」と言うことで、当時ネパールヒマラヤに造詣の深かった人達を名誉会員として迎えて発足したわけです。

数年は、エベレスト、ランタン等のトレッキングを中心として活動し、1970年頃から登山にも目を向け、インドの5,000m級から手をつけ始め

ました。この頃都岳連にも加盟して、1973年のカンジェラルワ（6,612m）初登頂、1974年ラムジュン・ヒマール（6,983m）第2登、1975年リシバハール（6,992m）初登頂、1977年コミュニズム峰（7,495m）登頂、1978年バツーラII峰（7,730m）初登頂と山の分野では成果をあげてまいりまして1981年のカンチェンジュンガ（8,598m）縦走に取り組んでいます。一方トレッキングのほうでは、1970年頃から、ヒマラヤンライブラリーシリーズの出版が始まり、ガイドブック的な役割を果たして来ました。トレッキングを行うに当たっては、計画をよりスピーディーに行うために航空会社と提携したこともありましたが、そのために山の分野からは会の性格を問題にされたこともありました。

1978年からはヒマラヤ登山学校や単なるトレッキングではないセミナートレッキングも企画実行しており、又事務所も東京に移し執行体制も変わって来ております。これからは81年カンチ計画、社団法人化を進める中で、今までのようなHAJ内に向けてのクラブワーク的な面だけでなく、外に開かれた活動も行うようになるだろうと思います。



山森 H A J が設立された 1967 年頃登山をやっていた人達はどんな志向をもって動いていたのでしょうか。又その中で H A J のような性格の団体がどうして生まれて来たと思いますか？

広島 僕はその当時ミールサミールへ行こうと思っていましたが、あの当時外国へ行こうとすることですら難しくて、ましてや学生がヒマラヤへ行こうとするのは大変でした。たしかに外貨枠の規制も緩和されてはいましたが、暗中摸索の状態だったですね。行く先のこともわからないし、行く方法もわからないという時代でしたから、H A J は非常に時代を先取りしていたと言えますね。ただそういう意味では外部からみて H A J はエージェントではないのかと思われた性格の時代はもっと早く終わるべきだったのでしょうかね。

・特殊性とあいまいさ

山森 運営している側としては、まだまだトレッキング隊を多く出す時期だと判断していたのではないのでしょうか。そのためには、現地へ入るまでのことは専門家（業者）に任せた方が良く思っていたのかも知れませんね。

当時ヒマラヤ以外の山はどうだったんですか。

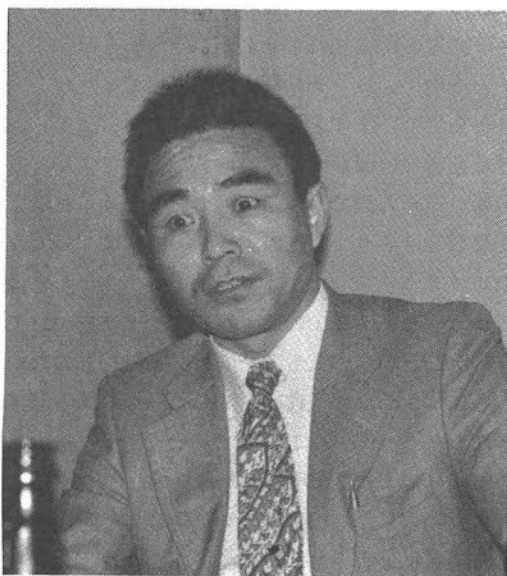
池田 1965 年に一般外貨になりましたね。1964 年にネパールが閉鎖されてしまって、これからのよいよ自分達がヒマラヤへ行く番だと思っていた人達は、アンデスやヒンズークシュに目を向けて積極的に行くようになりましたね。

その時期にトレッキングとはいえ、ネパールを目ざして H A J が設立されたのは、ある意味では不思議ですし、先を読んでいたと言えます。

日本の登山界ではあくまでも山岳会主義が主流でしたから H A J のような横断的な組織はなかなかないと思いますが、そういう面ではむしろかしかつたのではないかと思います。H A J の A をとったのは何年頃ですか。

稲田 A をとったのは、1975 年です。当時は会員の底辺拡大を計ろうとしていまして、「日本の旅世界の旅」層から「山溪、岳人、岩雪」の層まで全てを対象とした広い底辺の上に、つまりピラミッド状構造の上に先鋭的な部分がなければならぬ、という発想があったんです。いうなれば、トータルなヒマラヤということで活動して行く必要があると思っていた訳です。そこで A が入ると一般的な山岳会のイメージを受けるということではずしたんですよ。

池田 旅的な層から先鋭の層までという発想が最初からあったかどうかわかりませんが、普通の山岳会組織は逆だと思いますね。確かに一般の山岳会でも奥多摩から北アルプスまでオールラウンド





な山登りをしようとは言っていますが、その意味は、奥多摩だけやっている人と穂高の冬をやる人とを会員にするのではなくて、奥多摩から入ってある程度育てて穂高の冬も出来るようにということです。そういうのとは全く別の尺度をもって会を造ろうとしたのはやはり面白い発想ですね。

又、過去日本にあった横断的な組織としては、RCCが代表的なものです。この場合は、目的を絞ろうとしていましたよね。或るものに向って目的を絞っていました。HAJの場合もヒマラヤに向って集まっていますが、多様性を始めから組み込んでいますね。何故そうなのか？その辺がユニークなのかも知れませんが、そういう運営をしている中で、カンチの縦走計画が出て来た時には、外から見ていると、HAJ自身がある演出をせざるを得ない面がでてくるのではないですか？

山森 遠征の面でも池田さんのおっしゃられるようなことはありましたね。当時の標語は「みんなのヒマラヤ」でしたが「みんなのヒマラヤ」とは何かという、登山の面では、アイゼンをつけて登ったことがない人も、一度も会ったことのない人も、ヒマラヤに行けば、楽しく一つの隊として登れるだろうということです。そういう性格のあいまいさのまま7,000m級の本格的な登山をやってしまいました。山登りのことを考えると池田さんの話されたように、絞っていかねばならな

いの逆にVの字のように開いていた訳です。

池田 一般の多くの山岳会がある意味ではセクト主義になりつつある時に、風通しを良くする意味ではHAJのような横断的な組織が必要だと思います。そのバランスは重要ですね。カンチもありトレッキングもありで会の運営は大丈夫ですか？

遠藤 HAJはそうあるべきだと思いますね。カンチもありトレッキングもありというのはHAJらしくて良いと思いますね。

森田 地方の人達は、ヒマラヤを志向していても自分の会としてはやれないということもあって、HAJの果たした役割はあった訳なんです。これは高く評価していかなければならないと思いますよ。

・ 普遍的性格が必要

遠藤 HAJが都岳連に入る時にも反対はあったんですよ。しかし、ヒマラヤを志向している人達が集っている会を都岳連の組織に入れなければ、どこの岳連にも所属できない人は結局ヒマラヤには行けないということで、ヒマラヤに行きたい希望を持っているのなら行ってもらおうと思って私は強かに推せんしました。

広島 既成の組織と違うことをやろうとするとともにHAJの存在意義があると思いますね。

池田 ヒマラヤサロンという性格と登山の性格を併わせて運営して行くことが両立して行くことが出来ることなのかどうか。常識でいえばむづかしいと思いますが、外部から見ていると興味がありますね。

広島 HAJはもっと登山の文化的な面をやるのが良いと思いますね。スポーツ的なこと以外のものが表に出てくる研究会を多くやってもらいたいと思いますね。それが又全国的な組織として今後伸びて行く要素になりそうですね。

山森 森田さん、労山の中のヒマラヤという面だけをとり上げてみますと比較的HAJの組織と似かよっていると思うのですが、どういうとらえ方をしていますか。

森田 そうですね、同じような経緯が見られますね。例えば、エージェントみたいなのという面で考

えても、'71~'72年頃大量の人達をヨーロッパに送り込んだ訳です。そのことは登山の大衆化ということで登山を文化的にとらえていた訳です。ただ、ヨーロッパへ行くということだけをとりえるとそれを登山でやりますと、どうしても金銭的なものがからんできてしまいますよね。組織の運営の中では金銭的な面では失敗できないですからどうしても、重点的にやらざるを得なくなりまして、それ以外の仕事が出来なくなって来た訳です。必要なことからやって行きますが、その面は登山から切り離れた訳ですね。

広島 日本人は金銭がからむとどうしても悪いことをやっているような感覚にとらわれがちですが、エージェンツ的でも多くの人達を送り込む方が大切ですね。海外登山でもまだまだ段階論が見られますが、そういう面を崩して行くという面ではきわめて良いことですよ。

森田 HAJの果たした役割はやはり情報をすぐに印刷物にして皆さんに提供してきたことにあとを思います。

池田 HAJだけのヒマラヤということではなしに、日本人のヒマラヤとしてとらえてもらいたいと思いますね。HAJの外にもヒマラヤの知識をもった人や権威のある人がいる訳ですが、その人達も引き寄せるような魅力ある会になってくれば、新しい組織の在り方として注目されますし、現在の山岳会的な組織から脱却できると思います。現在はまだHAJのヒマラヤという性格が強く、会員外との交流が少ないと見ています。

広島 そうですね。登山の文化的な面からヒマラヤ全体を見るようになってきますとそこにはある普遍的な性格が必要になってきます。普遍的になればそこに所属しない人も恩恵を得られるような団体になるべきだと思いますね。単なる山岳会になってはいけません。

今迄果してきた役割は非常に大きなものがあります。特にヒマラヤに行きたいと思っていた地方の人達にヒマラヤの良さを知らしてきた訳ですからね。

山森 会員の地域別の構成を見ましてもやはり、東日本方面が多くなっています。

尾形 ヒマラヤといえはまだまだ中央集権的な性

格があった時代に、地方にいて情報が欲しいと望んでいた人達にとっては、HAJの啓蒙が果たした役割は大きかったですね。それ以上にみのがせない功績は、渉外能力ではないでしょうか。単一の山岳会ではなかなか入れない例えば1974年のネパールのラムジュンですとか、或いは1975年のカシミールのヌン・クンやガルワールのリシバールなどにも渉外能力で入っています。そう考えると単一山岳会では行けない所でもHAJでならなんとか入れるのではないかという魅力はありましたね。

・組織と人と…

稲田 地方では情報不足も確かにありましたが、それ以上に岳連の体制下の中では行けなかった事の方が大きかったと思います。その時HAJを足がかりとして海外に出ていった人達が積み重ねた結果がHAJの体質を変えてきた要因でもあると思います。それは一方は非常に切実な要求をもって遠征の場をHAJに求めていたのに対して片方はまるっきりの仲よし会だったからです。

山森 HAJが岳連のような組織とは違うことは



◀ 広島三郎氏



はっきりしているのですが、HKTが実質的な活動を中止するようになったのはHAJとしては参考にしたと思います。

池田 HKTは委員の方に本来やりたかったことと違う方向になっているのではないかという意識が出てきた時にK2が始まって、ゆれているうちに最初のものを忘れたのじゃないかと思いますね。

広島 ヒンズークシュ、カラコルムに行きたいと言っても、本当にそこだけに行きたいのではなくて、ネパールでもインドでも良い訳ですよ。そういう人達がカラコルムへ行こうとしたらHKTの集会有る、そこへ行って情報を仕入れてこようという事ですよね。カラコルムやヒンズークシュが珍らしい頃はそれでも多少は良かったかも知れないんです。それを何回もやっていると委員の方もバテますし、委員は本当にバキスタンの奥が好きでやりたいんだけどできない。そこで仲間だけで研究会をやろうと決議したんだけど次が始まらなくなった。呼びかける側にも問題がありますし、序々に新陳代謝がなければダメですね。

池田 K2ショックではないですか。HAJも、カンチをやる人とHAJを運営している人とを分けておきませんと悪く言えば、カンチにあらざる人にあらざるになってしまう恐れがありますね。

山森 池田さんのおっしゃるように現実的には、カンチとHAJの総合企画をやっているのは同じ

人間になってしまいました。これはHAJ全体の将来を考えると良いことではないと思っています。広島さんのお話のように組織としては新陳代謝がなければいい発想も生まれてきません。また、組織運営をオーバーラップさせないで、良い発想を継続させていくためにはどうしてもしっかりした組織にしなければいけないということで社団化へ傾斜して行った訳です。

稲田 社団化につきましては一つには運営の方向性にタガをはめて、あまり逸脱したことをしないようにしたいということと組織としての体面を保たなければならないために永続性が問われてくるということで考えています。

池田さんや広島さんのお話に示唆されるところが多いのですが、確かに組織は人だと思えます。また永続的な事業も必要となって参ります。その中心にヒマラヤ研究所を考えております。人と機能の2つの面で社団法人を運営しようと思っております。

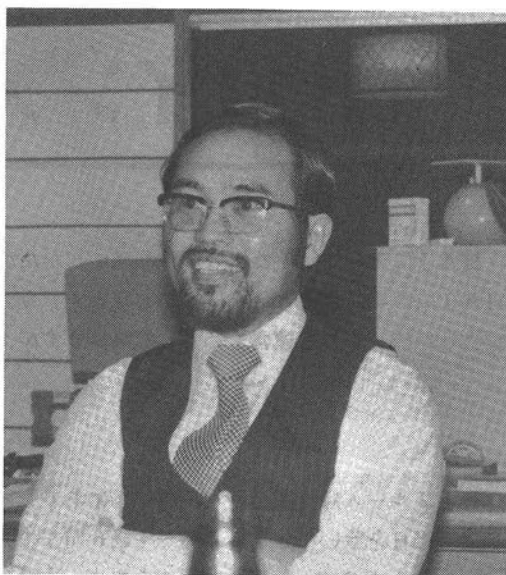
ヒマラヤ研究所は情報管理を主たる仕事として行きたいと思っています。池田さんのお話にもありましたようにHAJ外の英智を結集するような努力が必要だと思います。情報管理の方法としては一つにはモニター制を考えています。その他2～3名の常駐するスタッフを置きたいと思えますし、多くの人がヒマラヤに行っているこれらの体験を体系的にまとめて、それらの結果を各地で開催する研究会にフィードバックして行きたいと思っています。

池田 そうですね、現在では直接的な情報を求める傾向が強くなっていますし、その結果知りたい情報を得るとそれだけで全てを知ったような錯覚にとらわれ易いようです。

ヒマラヤ登山の全体を考えれば、基本的な情報センターさえキチンとしていれば、その年々変動する事項なんかは、大騒ぎしなくても良いと思います。そういう意味でも基本的な資料センターが欲しいですね。

・日本唯一の専門団体として

稲田 研究所は蔵書数を誇るというのではなくて



蔵書を動かして、どういう情報を造って行くかが大切です。生きたルームを作りたいと思うのが実行する手法はむづかしい。

池田 蔵書も市販されていて一般的に入手可能なものよりも、例えば登山報告書等を集められれば大変有意義な資料となりますね。

ネパールの登山学校はユーゴが支援していますが、日本は彼らにしてみれば、もっとやってくれてもいいんじゃないかと思っている訳ですね。そういう意味でも交流という時はギブ・アンド・テイクでいかなければダメですね。

森田 日本の登山界がまとまって行動するようなことを考えていかなければユーゴのように国をあげて当たるところにはかなわないですね。

稲田 実は今年ネパールから登山担当のシャルマ氏に来日してもらい北は北海道から南は九州まで5ヶ所で講演、研究会を開いた訳ですが、これなども渉外、交流の一環と考えています。ただ登山許可をお願いするということではなく、相互に交流しながらお願いする所はお願いしていきたいと思っています。今年はインドを予定していますし将来はヒマラヤ関係諸国6ヶ国のメンバーに一堂に会してもらって討論するようなことも考えています。

遠藤 日山協は公式な団体として動きにくい面もある訳ですが、その辺をH A Jが補完してくれるといいですね。

森田 H A Jはいろいろな団体に気軽に呼びかけられる体質をもっていると思いますので、そういう時は呼びかけてもらいたいですね。

稲田 これからのH A Jは、みなさんのお話にありましたように、ヒマラヤを対象とした日本で

唯一の団体として、H A J外の協力も得てヒマラヤ登山文化の中でヒマラヤを目ざそうとする全ての人々が利用できる情報・データの蓄積と提供を行い、ヒマラヤ諸国との交流の面でもより一層の充実を計って行きたいと考えています。そのためにも一刻も早く組織の充実を計り人材についても皆様の協力を仰いでいきたいと思っています。このためにも、社団化を当局のご指導の下に早期に実現させたいものと考えます。皆様の益々のご協力をお願い致します。

山森 本日は不十分な司会でまとまりのないものとなり申し訳ありませんでした。皆様の貴重など意見を参考にこれからの会運営に当って参りたいと存じます。本日はお忙しい中を本当にありがとうございました。これにて座談会を終ります。

会 員 住 所 変 更

氏 名	変更月日
羽根田 一 馬	54. 10. 15
山 崎 栄	54. 10. 16
藤 条 好 夫	54. 11. 14
高 橋 純 一	54. 11. 20
寺 本 滉	54. 11. 22
服 部 博	54. 12. 10

HAJインフォメーション

協会の利用法あれこれ

HAJに入ってはみたものの、利用のしかたがわからない — という方も多いかと思います。ところがHAJには実に様々なメリットがあります。今、HAJは80年代を迎えて、すべてのヒマラヤ志向派に役立つ組織づくりと運営をめざしておりますが、とりあえず現在のHAJの利用のしかたを説明します。

ルームの利用

HAJルームは交通至便な高田馬場にあります。日曜・祭日を除いて午前10時～午後6時まで開いておりますので、気軽に利用できます。また夜間に利用したい場合は、その旨連絡下さい。

《TEL》 03-367-8521

《あし》 国電山手線高田馬場駅下車（池袋寄出口）改札口を出て早稲田通りを小滝橋方向に徒歩約6分で右手に西村ふとん店があり、これを右へ入ってすぐ左側「淀橋食糧ビル新館」5階506号室。

①図書えつらん……どなたでも無料でえつらんできます。持ち出しはできませんが、コピーサービスを行なっています（B4、1枚20円）。図書は漸次充実させていきます。

②情報サービス……ヒマラヤ全域に関するすべての情報、資料が得られます。高所登山のデータからポーター賃に至るまで、どんなことでも気軽に問い合わせして下さい。また地方の方で地図、資料等のコピーの欲しい方は、コピー代、送料を同封下されば郵送します。これらの情報管理、サービスはヒマラヤ研究所設設計画とともに急速に充実させる方針であります。

③ヒマラヤサロン……態勢が整いしだい、ルームにて月1回「ヒマラヤサロン（仮称）」を設けます。毎回8ミリ・スライドなど用意し、何らかの話題を提供しますが、その場の雰囲気や気軽にヒマラヤの話をし、好きな人は酒を飲む — そんな場にしたいと思います。御意見があったらお寄せ下さい。なお、これは地方でも不定期に開きます。

④etc ……集会、会員どうしの待ちあわせ、あ

るいは遊び、目的なし、何でも結構。とにかく、あらゆることにルームを御利用下さい。

出版物のサービス

①機関誌『ヒマラヤ』（月刊）……今後さらに内容刷新をはかり、より充実した紙面づくりをめざしますが、会員の皆様の声をぜひお寄せ下さい。

②年報……1年間のHAJ活動の総決算として今後毎年発行し、会員には無料で配布します。

年鑑『HIMALAYA』（和文）及び英文版『THE JAPANESE HIMALAYAN JOURNAL』……現在、出版の予定で企画検討中です。

事業への参画

①ヒマラヤ登山学校……単なるパッケージ登山とは全く異なり、隊員全員が最初の段階から計画し、準備し、遠征のすべてを体験するように組まれています。高所登山入門の場として最適です。この企画の中で育ち、その経験をもとに2度目には自らの会で遠征を構築し、今秋には隊長としてヒマラヤへ行く会員も出てきております。取り組み方しだいでは非常に貴重な経験が得られる筈です。

《実績》1978年 ムン（7,135m）沖允人隊長
西稜より登頂。

トリスル 稲田定重隊長
I峰（7,120m）、II峰（6,690m）
にいずれも新ルートから登頂。
無名峰（6,100m）にも登頂。

1979年 キャンドラル（6,400m）
山倉洋一隊長 5,850mまで。

1980年 ケダルナート(6,940m)

内田嘉弘隊長、尾形好雄インストラクターらのもとに現在準備中。

②セミナートレッキング……これも単なるバックツアーではありません。すぐれた講師のもとに、フィールドワークを実践しながらの旅です。1979年12月30日～1980年1月16日にかけて、五百沢智也講師、岩水竜峰隊長のもとに、ジュガールヒマール・パイラブクンド付近において、充実したセミナートレッキングが行なわれました。めざす地域もあたりまえの場所ではなく、常に新鮮でユニークなフィールドを用意しております。

③国際交流活動……昨年のシャルマ氏(ネパール政府観光省登山課長)につづき、今年はインド登山財団(IMF)会長H.C.サリン氏の招請を予定しております。昨年同様全国各地で研究会を設けますので、ぜひ御参加下さい。その他、世界各

国山岳団体との交流、情報交換なども計画しており、その成果はすべてあらゆる形で全会員に環えられます。

④日本ヒマラヤ会議……(社)日本山岳協会の後援のもとに全国各地にて、最新で正確な情報を提供していきます。(P8 参照)

※その他、登山隊への参画、地域集会(全国各地、定例、非定例)への参加、各専門研究会活動、また機関誌「ヒマラヤ」への投稿、研究発表などなど、HAJには様々な利用のしかたがあります。※またHAJの会員は各界、各層10代から80代まで様々な志向、北から南までというように広がり、深さを持っております。会員どうしの幅広い交流こそHAJが提供できる最大のメリットかもしれません。たくさんの方々との心豊かなつき合いは新しい世界を作り、行動を触発するはずで

会費変更についてのお願い

＝55年4月1日から年会費を6,000円に＝

HAJの事業は現在飛躍的に増大しており、名実ともに我国におけるヒマラヤ・センターをめざして懸命の努力がなされています。

昨年秋からの常務職員の設置、ルームの開催、各地での日本ヒマラヤ会議開催、国際交流による研究会開催、レファレンスサービス開始。更に本年度より年報の配布等々、最大限の会員サービスが展開されています。

これらの各種事業を実施するためには多額の経費を必要としますが、とうてい会費収入だけでは不可能であり、様々な手当をしながら維持しております。しかしながら、社団法人発足を間近に控え、更に会員サービスの抜本的向上をなすためには、会財政の基本となる会費収入の確立が最も重要になってきております。この件については去る

12月の常務理事会において真剣に検討され、最低限の措置として、現行会費を55年度から2,000円アップし、6,000円にせざるを得ないとの意見が提出されました。

ちなみにHAJの全財政規模は現行会費4,000円になった昭和50年度に比較して約5倍に拡大しております。

つきましては、今後とも更に一層の会員サービスの向上と会財政の強化安定に全力をつくしますので、すばらしいHAJを建設するために会費変更について、会員各位の御理解をお願いする次第です。

なお、正式には55年4月の総会において提案し、御承認をお願いする運びとなります。

遠征学入門

X

遠征準備あれこれ

——その4——

西郡 光昭

昨年11月24日、山の先輩Kが富士山で滑落して死んだ。7合目からツバクロ沢をスキーで下ろうとしての事故だったから軽卒の謗りは免れない。あまり上手でもないスキーで（といっても北海道生れの彼は筆者などの及ぶところではない腕だったが）、いかに温暖な天候だったとはいえ、かなりのアイス・バーンを滑ろうとしたのだったからうかつであり残念なことであった。

とりわけ筆者にとっては、上述のように山岳部で酒を飲みながら山登りの楽しみを終えてもらった良い先輩であり、'76年、母校のアンナブルナⅡ遠征の際は筆者が隊長、Kが副隊長で共に苦労した経験があるだけに彼の死は何とも悔しい限りである。次の遠征計画もあってH A Jの会員には生前何かとお世話になったことだったので、この紙面をお借りし、Kに代ってお礼を申し上げる。

タテ系列と同じ釜のメシ

物故した人間を例にとるのはどうかと思うが、アンナⅡ峰遠征では、11名のチームの中で隊長である筆者の先輩は、副隊長のKと、記録および学術調査担当のHの二人であった。筆者が隊長を引き受けるについては若干のいきさつがあって、当初隊長に内定していた先輩が急拠、都合が悪くて行けなくなったと言いつ出したからであった。どう考えても家庭の都合が理由とはいいたくない。どうも彼は遠征計画が少し堅苦しく、型にはまって進められて行くのが気に入らないようなのだった。形式ばらざるを得なくなったのにもそれなりの理由があって、当時は金も暇もない信大の山猿たちが遠征をしようとなればそれなりの大義名分がどうしても必要で、それだけゆづうの効かない組織運営をせざるを得なかったのだが、大ゲサでない自前の気楽な遠征が好ましいと考えていた彼には、次第に肌合いの違いが大きく感じられるようになって隊長を降りると言いつ出したに違いない。

いったん言いつ出したら後に退かない彼の辞退表明はついて撤回されることなく、代って、実行委員会事務局で後押し役をしていた筆者にお鉢がまわって来た。前年エベレスト・スキーに参加した自分にとっては、翌年また長期に職場を空けることは許されなかったが、「職場のことは何とかするから」という仲間の声に押されて引き受けるハメになってしまった。

内輪ばなしが長くなってしまったが、隊長を引き受けることになって最初に気をつかったのは、その時にはすでに決っていた隊員の顔ぶれ、それも特にK、H、二人の先輩に対してであった。ご存知のむきも多いと思うが、ひと一倍旧式な自分にとっては、こういうチームの運営となるとどうしても先輩・後輩の関係が気にかかる。それを割り切ってコトを進めることができない。というよりは、むしろそれにしがみつかないと何もできないし、合宿でも何でもそのような年功序列のタテ系列を旨として行われてきたのだし、“同じ釜のメシ”を食うことでまとまってきた、そういう山

中央インドでの定着 ～その4～

藤井 毅

1932年3月10日、エルウィンとシャームラーオはKaranjiaの村で自分達の活動と生活の拠点となる「アーシュラム」の建設を開始した。それまでは、村落の中でムサルマーン(イスラーム)の商人が貸してくれていた小屋住いをしていたのだが、シャームラーオが簡単な治療を村人達に施すことによって、ようやく村に入り込む手がかりを作ったのであった。「アーシュラム」はすべてがゴーンドの家の様式にならって作られた。住屋の前には、アッジの聖フランチェスコにならった小さな教会も建てられた。ここにいて、彼らはようやく実質的な活動の足場を得たのであった。

この「アーシュラム」を中心として、彼らは学校を建て、診療所を開き、「トライブ」の人々のための奉仕活動を展開していくのである。当初それは、ガーンディーの方法とフランシスカン主義をあわせたような形をとっていた。ここでの生活を通して、後のアルナーチャルに至るまで、エルウィンは数多くの著作を生み出していくのである。そして、その中でエルウィンは大きな転換をとげたのであった。即ち、「教会」との訣別とガーンディーとの離反、人類学的な調査研究への興味の萌芽がそれである。その時期が決して安寧で平坦なものではなかったのは言うまでもない。そして、それは同時に彼自らの生涯をインドで終えることを決する時期でもあったのだ。今回からは、この転換期がいかなるものであったかを見てゆきたい。

まず、前回で触れることのできなかった問題点から見てゆきたい。つまり、インド政界への誘い

のあった中、なぜ彼はそれを断わり、ゴーンドの中での活動を選んだのかということである。少なくともインド到着から1930年代初頭にかけて、エルウィンはオックスフォード出身の牧師でありながらインド民族運動に参加するものとして、ロマン・ロラン、C.F.アンドリュース、ブリヴァート夫妻、ルイゼット・ギュイエスといった人々とともに、インドの知識層・ヨーロッパでインドに関心を抱く人々の間で名を馳せていたし、国民会議派の運動に自らも積極的に参加し発言もなしていたはずであった。それなのになぜそのような態度をとったのであろうか。また、そういうエルウィンにとって「政治」と「宗教」とはいかなるもので、どのような関係にあるものとして認識されていたのであろうか。

前にも述べたように、Karanjiaに入るまでのエルウィンはガーンディーを信奉し、彼を媒介としてインドを見ようとするものであった。その点で、ガーンディーが何を考え、どう行動するかによって、エルウィン自身の身の処し方も大きな影響を受けざるを得ないものであった。だから、1933年にかけてガーンディーが語った言葉を検討することは、エルウィンの態度を理解するうえで大いに有効であるに違いない。

「……神は人格としてではなしに行動の中に姿を現わします……」・「真理は、思索と行動とになければならない。真理への献身がわれわれの存在を正当化する唯一のものである」・「私は殊に改宗を目的に自分の信仰を他人に語る人を信頼しない。……信仰は告げることを許さぬもので

に大別して考える。

- ① Krish Nal 地域
- ② Kiar Nullah 地域
- ③ Nanth Nullah 地域 (Kibar Nullah を含めて)
- ④ Bhazun Nala 地域
- ⑤ Barnaj Nala 地域
- ⑥ Darlang・R. 地域
- ⑦ その他・周辺

なお、Nal、Nala、Nullah はいずれも「谷」という意味で、ヒマチアルから西で広く用いられている。

Krish Nal 地域

ヌンの南の広大な谷で、上流に大きな Chirung 氷河および Dechi Nal 他の支谷を抱えている。Chirung La によって交易路がザスカル、ラダック側と結ばれており、地理的にもキシュトワール・ヒマールとヌン・クン山塊を区分している。

1904 年にヌン・クン山群を一周したワークマン夫妻の記録からはこの南の山域について知ることは少ない。

1953 年、ヌンに初登頂したフランス隊 (Bernard Pierre) は、北面からのアプローチを妨げられ、この地域を通っている。しかし、山群に関する参考となる記述は出てこない。

文献的に最も貴重なのは 1913 年、クンに初登頂したイタリア隊の記録である。この隊は、登山活動のみでなく、広域におよぶ踏査を行ない、学術的にもすばらしい成果をあげた。キシュトワールおよび Doda 河流域の精細な 10 万分の 1 地図はその成果品の一つである。

彼らは、チルン・ラ (Chiroong La と記している) を越し、ヌン・クン山塊をほぼ一周している。チルン氷河 (彼らのいう Fariabadi 氷河) の下部にも入っている。

この隊によって、クリシュ・ナル左岸の山々の標高が測定されている。しかし、測量は南方側からであり、したがって分水嶺上のピークにのみ標高が与えられ、クリシュ・ナル側は全くの空白になっている。

キシュトワール、ヌン・クン、ザスカールを調べる上でこの隊の公式報告書 "Nel Himalaia Cashimiriano : Mario Piacenza" を外すことは

できない。

いかにもイタリアのヒマラヤ本らしい豪華な装いで、600 頁余りのボリュームを誇る。これだけの文献は数多いヒマラヤの書にあっても屈指のものである。ちなみに重さは 3 kg を超える。

これからカシミール・ヒマラヤを語るにあたって大いに参考にして行くと、困ったことにイタリア語である。しかし、350 余の写真とイラストが大いに理解を補ってくれる。

また、1979 年、Dechi Nal に入り、P.6329 を北面から試みた本会々員 鈴木 修氏ら仙台商業高校 O B 隊の業績は注目に価するものである。

P.6329 そのものは 1978 年に Kair 谷からイギリス隊 (R. May ら 3 名) によって初登頂され、"Jan-an" と命名されているが、Dechi 谷は全くの未踏の地であったのである。

登頂こそならなかったものの、彼らのもたらした情報はこの地域の解明を飛躍的に前進させるものである。本連載に鈴木氏にも登場願って進めたいと思う。

なお、本地域の地図は、前記したイタリア隊のもの以外に、AMS の NI 43-11 があるがこれは現在のところ入手不能である。

サーベィ・オブ・インディアのディグリーマップ 52/C はキシュトワール全域とザスカル、ヌン・クンの一部を含めて詳しい。但し、山の部分は標記が少ない。

T.P.C の G-7D (航空図) は 50 万分の 1 にしてはポイントが割合に記されている。

これらの地図および各隊の記録を参考に作成された井口邦利氏、内田嘉弘氏、沖 允人氏らのカムカルテがあるが、多くの空白部分の存在が果てない夢をかきたててくれる。

この地域は、さしたる高峰もなく地味であるが、まじめなヒマラヤニストにとっては今後永く宝庫となろう。

最高峰は、Kiar 谷、クリシュ谷、Rumdun 谷のジャンクションにある P.6560 といわれるが、このピークにも種々の問題がある。

次号から幾回かにわたってカシミール・ヒマラヤに焦点をあててみたい。

(次号へ続く)

キシウトワール I

稲田 定重

Kishtwarの山地を独立したKishtwar Hima-layaと呼ぶには地域の狭さや地理上から充分な根拠がない。

サー・シドニー・バラードは、古くこの地域までパンジャブ・ヒマラヤの内に包含しており、メイスンもこれを踏襲している。また、現在でも登山者間の呼称はどうあれ、地理学関係ではこの呼び名が用いられている。

現在、この地域は行政上 Jammu & Kashmir 州になっており、また、かつてのパンジャブ・ヒマラヤの大部分は Hima chal Pradesh 州に入り、同名の呼称がそのヒマラヤ地域につけられている。

パンジャブ・ヒマラヤのうち、カシミールにある部分はかつてカシミール・ヒマラヤと呼ばれたこともある。

地理学上はともかくとして、われわれ登山者の間では「カシミール・ヒマラヤ」という区分をするのが妥当と思われる。

その中には、キシウトワールの山地（地理上のビル・パンジャールの一部）、Nun・Kun 山塊、Zaskar 山地、スリナガル盆地周縁山地が含まれよう。

ラダーク地区のインダス河北方の山地は、カラコルムの東方延長と考えてもよいが、Nubra 河、Pangong Tsho の南のいわゆるラダーク山地はカシミール・ヒマラヤのエリア内と考えたい。

インド領ヒマラヤの呼称区分は、地形・地質・行政区分等を併せ考えて実態に則して検討され確定することを早急になされないと徒らに混乱と困惑を招くことになる。

さて、キシウトワール山地をキシウトワール・ヒマールと仮称して進める。

キシウトヒマールはヌン・クン山塊の南、スリナガル盆地の東南縁にあり、Chenab 河の流域に入る。ヒマチャル・プラディシュ・ヒマラヤとの境界は行政区分とも関連して、Kang La (5,110m) とし、それから西に延びる Shepuortarsug Dhar でもって区切りたい。すぐ南は Shiva (6,142m) である。

また、ザスカールとは明確な分水嶺（グレート・ヒマラヤ主軸）によって区分されており、Doda 河の水はインダスに入る。グレート・ヒマラヤ主軸はチェナブ河とインダス河の間を南東に続く。

広大なキシウトワール・ヒマールは、その中心部分が登られているだけで、ひじょうに未知の要素の多い地域が残されている。便宜上、次のよう



Kish Nal地域と周辺(井口邦利・「岩と雪」38号付図より)

のつきあいの中で育ってきたのだから、どうしても気をつかうことになってしまうのだろう。

しかし、こうなったら仕方がない。隊長としての“指示”も先輩の顔色を伺って……などと例によって優柔不断な態度でのぞむことになってしまった。

そしていよいよ現地でということになるが、結果的には筆者の“下衆の勘ぐり”はまったくの杞憂に過ぎなかった。登山は、アタック隊員の滑落、行方不明というアクシデントで失敗に終わったのだが、この後にも先にも二人の先輩にいかにかえられ続けたかは筆舌に尽しがたく、自分の愚しさ、恥しさに消え失せたいと思うほどだった。この時の事故は、後輩の隊長が先輩に気をつかったためなどではもちろんなく、ひとえに筆者のタクティクスの拙劣さによるものだったことは歴然としていた。

富士山遭難の教え

再び富士山での事故に戻るが、一緒にスキーで下る予定をしていた後輩は、ツバクロ沢の状況を見て「やっぱりヤバイから、スキーは止めて歩いて下りましょう」と先輩のKに進言したという。この後輩もスキーは仲々なのだが、当日は特に膝がくたびれていて自重したのだという。Kは以前（といっても5月に）滑ったことがあるから大丈夫と主張する。しばらく先輩・後輩のやりとりがあって、Kだけが試みに滑ることになった。スキーを付けて斜滑降をはじめたが、案の定エッチングがうまくいかず、これはダメだから歩いて下ると元の位置に戻ろうとした直後に滑落したのだという。

通夜の集りでその後輩は、「僕がもっと頑固にやめましょうと突っ張っていれば……」とそこまでしか言葉にならず号泣した。

筆者は“同じ釜のメシ”で見掛け上正当化されるタテ系列の悪弊はアンナブルナの遠征で経験したごとくわが仲間にはなかったと喜んでいたのに、こんなところに潜んでいたかと愕然たる思いであった。そしてこれは個人をうんぬんするレベルで

はなくて、よってをもって立つ土壌をこそ問題にしなければならぬだろうと思ったことだった。

しかし総じて、遠征隊の中でリーダーや隊員の決定が年功序列型でなく行われているらしい最近の傾向を望ましいことと思いたい。ステイタス・シンボルとしてのリーダーもあるのだろうが、関心はないので論外として、年功を追うこと必らずしも秀れたリーダーや隊員を輩出することではないのだから、年かさや年功にこだわらず能力ある人間をどんどん登用すべきで、年長者も無様にそれにこだわるべきではあるまい。

話の筋道から外れるかも知れないが悪例をひとつご紹介。

昨年暮から1月中旬にかけて行われた宮城県岳連海外登山研修隊と称するシロモノ。当地岳連主催のピサン・ピーク（マルシャンディ川沿いのピサンの裏山で標高6,091m）の“冬期世界初登頂”を目指したチーム。当地のさるボスがデッチあげたもので、高体連の先生方を中心として、指導員の研修を兼ねてと聞こえは大変よろしい18名。岳連主催なのに傘下の団体はなにが何だかさっぱり知らず、隊員資格の指導員は検定もなしに無事合格とまるでムチャクチャ。幸か不幸か“冬期初登頂”を果たした後はカトマンズのホテルでドンチャン騒ぎとあいなって同宿の日本人のみか、外国人からもひんしゅくをかうお粗末。地元宮城では岳連創立以来の快挙と大変だ。こんな愚挙には諸兄姉なんの関心ももたれまいが、筆者は同郷人のこととてがっかりしてしまい、こんなことでは“遠征学”の拙稿も近々やめて旗をまとめて退散せずばなりますまい。

ある。信仰はの中で生きているものであり、したがってひとりでに広まるものである。」(ルイス・フィッシャー著/古賀勝郎訳、「ガンジー」紀伊国屋書店、1968、pp311-312、343)。

その頃までにエルウィン自身も、神秘主義思想・神秘主義文学の研究を通して、これと同様の認識に到達していた。つまり、具体化されない真理は意味をなさず、現実化されない宗教上の理念は偽りのものだったのである。そういう彼にとって「政治」の場への参加は、単にその思想・理念の具現化のためのひとつのあらわれにすぎず、「政治」活動そのものや、形骸としての「民族運動」自体に目的があったわけではないのである。そして、当時彼はまだ、キリスト教でいう「贖罪」意識にとらわれ、その実行を願っていたし、アッジの聖フランチェスコの生き方に自らを引き付けようとしていたのであった。そのため、単に「民族運動」であるということだけで政治の世界に身を投ずることは決して望まれることでもなかったし、その必然もなかったのである。それよりも、「贖罪」のため、聖フランチェスコのようにゴンドの人々の中で働き、その中で真理を具体化し、獲得していく方が、はるかに地道で望ましいものであったのだ。「政界」に身を投じることはそれとは全く異った力関係の中に身を置くことになるであろうことは、ガンディーやバーテルらの政治的駆け引きのしたたかさを理解していなかったその頃のエルウィンでも、おそらくわかっていたに違いない。

更に別な見方をすると、エルウィンがインド政界への誘いを断わりKaranjiaへと向ったこの時期は、ガンディー自身の、そしてイギリス人にして牧師でありながらインド民族運動に深くかかわった、エルウィンの先人にあたるC.F.アンドリュース自身の思想的・社会的活動の転換期と一致していたのである。不可触民への分離選挙の問題をきっかけとして、ガンディーは政治より身を引き不可触民の福祉に専念することを決めるのであるが、これはその伏線となる時期であったし、アンドリュースも再びオーソドックスな国教会の

枠組の中にもどり始めた頃でもあったのである。揺れ動く政治情勢と周囲の人々の様々な変化を見るなかで、最も着実に、最も徹底した形で、自分の考えを具体化するのには、ゴンドの中での定着が最善であると考えるにいたったのである。

自らの思想を現実を通すことにより築きあげようとするその徹底において、エルウィンはその時代に数多く存在した“インド事情通”や民族運動への安易な同伴者達とは違っていただのである。アンドリュースにしても、政治により深くかわり、一時期裏切者と呼ばれたことはあったにせよ、晩年は教会に復帰し、しかるべき評価の中で死んでいったのである。それにくらべエルウィンは、キリスト教思想をも乗り越え、「教会」と対立し絶縁していくなかで、全く独自のものを為し遂げていったのである。

アーシュラムが完成した後、日常の活動を続ける傍ら、エルウィンは数冊の本を執筆し出版する。Mahatma Gandhi (London, Golden Vista Press, 1932), Truth about India - can we get it? (London, Allen & Unwin, 1932), Religious and cultural aspects of Khadi (Madras, MR Seshan, 1932) がそうであり、そして出版は翌年になったが、アッジの聖フランチェスコについての原稿が書かれた。この時期の彼の関心を示して余りあるタイトルである。

Karanjia での生活をはじめて時を経ずして「教会」当局との対立・衝突が日に日に、目に見える形で激しくなりはじめていた。一方、ガンディーは未だ獄中にあり、そこより分離選挙への反対を訴え続けていた。その中でエルウィンは、雨期の間、インドの実情を訴えるために、一時ヨーロッパを訪れることを決めるのである。それが予想外の結果をまねくことは、その時考えも及ばないことであった。

＝つづく＝

◎編集部移転のお知らせ

本年2月10日より6月10日までの4カ月間、編集部を下記に移転します。この間、編集担当の角田は不在になり、かわって伊東が業務を行います。

《臨時編集部》〒979-13 福島県双葉郡大熊町
大字下野上字 大野 155-3 伊東満方

◎事務局日誌

月日	曜	摘 要
7	月	事務局打合せ会（ルーム、山森他） 情報管理懇談会（ルーム、水野勉他）
8	火	カンチェンジュンガ資金対策（各スポンサーとの協議、東京） 嘆願書協議（外務省）
10	木	各国山岳団体へ交流文書発送（11カ所）
11	金	日高食品と協議（岩手県水沢市、高橋亭夫他）
12	土	報道機関と協議

月日	曜	摘 要
		「ヒマラヤ」99号発送（ルーム）
1.15	火	法人化関係書類整備
16	水	セミナートレッキング隊帰国 カンチェンジュンガ資金対策、各スポンサー（4カ所）との協議
17	木	野田衛氏インタビュー（サンケイ新聞社）、法人化事務検討会、日本ヒマラヤ研究所設立協議（ルーム）
19	土	カンチェンジュンガ偵察隊梱包（ルーム）
22	火	写真メーカーと協議（仙台）
23	水	カンチェンジュンガ資金対策
24	木	インド登山財団、エア・インディアへ文書発送
25	金	カンチェンジュンガ報道機関と協議 文部省と法人化について協議
26	土	日山協海外登山技術研究会（27日まで、 於横浜 稲田、山森、角田、他出席）
28	月	報道機関との協議（東京）

◆一寸感◆

▶太陽が地球の裏側をまわって再び顔を出すまで机に向かっていたある朝のこと、疲れきった眼球に突き刺さってくる陽光の強さに意味もなく喜びを感じたことがあります。しいて理由づけするならば「無我無中になっていることの喜び」とでもいうのでしょうか。「そりゃオマエ、マゾだよ」とある友人に言われましたが、ヒマラヤに狂った連中とは、みんなそんなものなのだと思います。

▶カンチへ行くため、4カ月程編集を離れますが、気鋭の新編集者が留守中の業務を担当します。よろしくお願いします。（T）

ヒマラヤNo.100（3月号）

昭和55年 2月20日印刷 55年3月1日発行

発行人 柴田 金之助

編集人 角田 不二

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒160 東京都新宿区高田馬場 3-23-1-506

郵便振替 東京 0-48954 「日本ヒマラヤ協会」

原稿募集

ニュース ヒマラヤ（中央アジア含む）の各地域の社会情勢・現地事情（入山事情）の変化、日本を含む各国登山隊の動勢、その他気のついた事をお知らせ下さい。ニュースソースも併記して下さい。

紀行 遠征、トレッキング、旅、etc ……。

ヒマラヤ及びシルクロードに関する地域なら何でも結構です。“記録”ではなく“紀行”としてお気軽に御投稿下さい。400字詰原稿用紙6～8枚程度、横書きでお願いします。

日本からヒマラヤから ヒマラヤ等に出かけた際の印象、現地からの便り、ヒマラヤに関して日頃思っていること何でも結構です。「ヒマラヤ」編集部やH A Jに対する提言などもお寄せ下さい。

またヒマラヤ地域に出かけられる方、ハガキで結構ですから御一報下さい。

★ 投稿は会員、非会員を問いません。採用分には掲載誌を贈呈致します。

ヒマラヤ1~100号総索引

A. 論説、研究、報告

B. ガイド、紹介

C. 記 録

D. 紀 行

E. エッセイ、書評、物語

F. 連 載

G. その他

(a) 特別事業計画

(b) その他

H. 会 務

(a) 総会、理事会報告

(b) 一般集会、研究会報告

※ミニニュース、集会案内、図書・資料等の紹介、
会員だより、ツアー日程、募集、ヒマラヤに関する
質問と解答、広告は除きました。

※左は号数、右はページ（No.1～No.19は通しペ
ージ）です。

A. 論説・研究・報告

・協会の意図するもの 会長柴田金之助 1- 1

・仏教とネパール(1) グルダルマ・ラトナ

金井 典子 訳 1- 8

・ " (2) " 2- 15

・ " (3) " 3- 47

・ " (4) " 4- 77

・ " (5) " 5- 89

・ " (6) " 6- 99

・ヒマラヤ地方の王国(1) P.Pカラン、W.Mジェ

ンキンス 沖 允人 訳 7-126

・ " (2) " 8-147

・ " (3) " 9-175

・ " (4) " 10-194

・ " (5) " 11-226

・ " (6) " 12-271

・ " (7) " 13-300

・ " (8) " 15-388

・ " (9) " 24- 20

・ " (10) " 26- 28

・ " (11) " 27- 28

・ " (12) " 28- 26

・高山病ノート(上) 阿部 淳 6-117

・ " (中) " 7-133

・ " (下) " 8-153

・ " (補遺) " 11-229

・カシミール(2) 国境紛争 大木滝次郎 7-131

・カシミール(7) 参考資料について

沖 允人 12-287

・カシミールとラダックの山々(講演速記)

F.M.ハスナイン博士

沖 允人訳 15-379

・ネパールの物価(1971.1調べ) 18-506

・ポカラの物価表(1970.1.1)浜理事調査 19-546

・深田久弥さんの功績について 野上成男 20- 22

・中国を知るための一般的文献

大木滝次郎 23- 24

・List of Peaks around Manali

No.1, No.2 29-5, 29-8

・インドのすばらしい“何か” 森本達雄 30- 4

・スワート地方の概要 出口 当 34- 10

・ネパールのシェルパ(1) J.ボーディロン

山下政一 訳 34- 22

・ " (2) " 35- 18

・ネパールの宗教 岩水 竜峰 36- 20

・リエゾン・オフィサー、サーダーおよびポー

ターの保険に関する規則 37- 23

・ガルワール・カシミール地区、大幅に外国人に

オープン、ラダックの一部もー

沖 允人 37- 28

・ラダック入域についてのインド中央政府内務省、

通達書 38- 28

・ブータン・ヒマラヤの桃源境 「インド英字新

聞」1972年9月10日号より、沖允人訳 39- 9

・ネパールにカンバ族騒動 清水 澄 39- 14

- ・ネパールの宗教に関する一考察(岐阜女子大学
・紀要より) 岩水竜峰 39- 16
- ・ " " 40- 14
- ・ガルワルの初期探検者たち 大木滝次郎 40- 5
- ・1974年前半のインドヒマラヤ登山(速報)
沖 允人 40- 28
- ・世界の屋根の争い -"LINK" 1974年10月6
日号より 沖 允人 41- 1
- ・アルチの寺(ラダック) Mohd Deen khan
(歴史学者) 41- 3
- ・H A A Jとは何か一現状と将来 稲田定重
42- 2
- ・体験的インド・ヒマラヤ登山渉外論
清水 澄 43- 17
- ・カシミール Mala Simgh
訳 鈴木 康志 44- 5
- ・ハルディオル7,151mの悲劇 1974年インド・
ニュージールランド隊 沖 允人 45- 7
- ・ブータンの人々のくらし 戸波 啓子 47- 1
- ・ネパール小史 大木滝次郎 47- 3
- ・ネパール農業・農山村の現状(月刊地理第20
巻第2号より) 山野 明男 47- 4
- ・カトマンズ・デリーの登山用具、食糧などの値
段 1974年11月現在 沖允人・佐々木正 47- 15
- ・インド登山規則 1975 47- 21
- ・シェルパーエベレストの人々
MARIO FANTIN
山下 政一 訳 48- 16
- ・ラダック<<その1>> N.L BAKAYA
沖 允人 訳 48- 19
- ・ " <<その2>> " 49- 6
- ・タジ・マハール"大理石の城"
倉橋洋次郎 49- 2
- ・ヒマラヤ概説 大崎 正信 51- 1
- ・インドヒマラヤ概説 沖 允人 53- 3
- ・ネパール政府 登山規則を一部改定 53- 7
- ・ラダック小史(1) 征服と崩壊そして平和
大木滝次郎 53- 11
- ・ " (2) " 54- 8
- ・アッサム北部の山岳地帯をめぐって
藤井 毅 54- 1
- ・ラダックの開発 インドの月刊新聞「HIMA
VANTA」1975年3月号より 54- 2
- ・インドの北辺境(1) スカルドウからレーへ
フレデリック・ドリュエ 55- 10
- ・ " (2) " 56- 2
- ・ヒマラヤとシルクロードの音楽 花崎 洋
56- 13
- ・<<創立10周年をひかえて>>HAJを考える
その1 稲田 定重 57- 1
- ・その2 組織とメンバーのあり方
山倉 洋一 58- 1
- ・その3 ヒマラヤとシルクロードの何に興味が
事務局 59- 1
- ・その4-1 ヒマラヤへの最短距離
小林 英見 60- 1
- ・その4-2 私とヒマラヤ 堀内 立三 61- 1
- ・その5 もうひとつのHAJ-ヒマラヤの高峰
をめざさないということ 藤井 毅 62- 1
- ・その6 私とHAJのつき合い
黒沢 文代 63- 1
- ・ネパールの外国人に関する規則改訂される
B.ランジャン 57- 2
- ・ラダック (1) S.G.コウル 57- 4
- ・ " (2) " 58- 6
- ・最近の映画とテレビから 57- 19
- ・サセル・カンリ=ラダックの名峰
ラダック研究会 58- 2
- ・わが国で聴取できるヒマラヤ諸国の放送
稲田 定重 58- 3
- ・ラマ教の世界 岩水 竜峰 58- 9
- ・ヒマラヤ関係地図-市販リストから 59- 5
- ・ロングスタッフのサルトロ峠越え
沖 允人 59- 9
- ・ラダック(その1) Govt.of India発行
「Ladakh」より 小栗恒夫訳 65- 18
- ・ " (その2) " 68- 4
- ・ " (その3) " 宗綱チズ訳 69- 11
- ・ " (その4) " 70- 6

- ・ラダック(その5) Govt. of India 発行
「Ladakh」より 宗綱チズ訳 88- 4
- ・パキスタンを知るための本10冊
阿部 淳 66- 9
- ・H&Sの宗教(その1)ゾロアスター教
岩水 竜峰 69- 8
- ・ " (その2) インドのゾロアスター教
" 70- 11
- ・ " (その3) シーク教
" 71- 6
- ・ " (その4) シーク教(続)
" 72- 11
- ・ " (その5) ジャイナ教
" 73- 8
- ・ " (その6) ジャイナ教(続)
" 76- 11
- ・ " (その7) 仏教
" 79- 5
- ・シルクロードの山と人(講演要旨)
水野 勉 69- 14
- ・キシュトワール・ヒマラヤ 千葉 良正 70- 3
- ・チベット入城の日本人たち(講演要旨)
金子 民雄 70- 16
- ・インド登山界、最近の活躍
Sushil Pahiya 70- 17
- ・インド・ヒマラヤへのさそい(講演要旨)
ジョギンダール・シン 71- 12
- ・ヒマラヤの村と人(講演要旨) 辻井達一 71- 14
- ・ネパールの新しく解禁された山々 78- 22
- ・ダライ・ラマとラマ教の世界(講演要旨)
井ノ口泰淳 79- 6
- ・ "
岩水 竜峰 79- 7
- ・インド・ヒマラヤ主要和文文献 80- 1
- ・インド・ヒマラヤ登山年表 沖 允人 80- 1
- ・中央アジア・ヒマラヤ新刊書 82- 1
- ・ " (追加リスト) 83- 14
- ・インド・ネパールのこと「福井歯苑」№56
より森岡武一 85- 7
- ・インド・ヒマラヤ記録集成 沖 允人 87- 1
- ・インド・ヒマラヤ登山規則(1979) 87- 68
- ・インド・ヒマラヤ主要和文文献 87- 74
- ・ヌンは7,000メートル峰か 安藤忠夫 88- 1
- ・山をめざして—CMDR. Joginder Singh 氏への
インタビュー Youth Times より
中村好江訳 88- 12
- ・インド東北部の動向 89- 11
- ・ひとつの新聞記事から 91- 7
- ・現代のヒマラヤ志向とは? アンケート調査
91- 8
- ・続・現代のヒマラヤ志向とは? 92- 10
- ・インドヒマラヤ1978年の記録(1)〜日本隊を除く〜
稲田 定重 92- 6
- ・ " (2) 93- 8
- ・ " (3) 94- 8
- ・Mr. Sharma をむかえて ネパール・ヒマラヤ
その現状と将来 編集部 95- 7
- ・ヴェリエル・エルウィン小伝(1)
藤井 毅 95- 22
- ・ " (2) 96- 22
- ・ " (3) 97- 22
- ・ " (4) 98- 22
- ・ " (5) 99- 22
- ・ " (6) 100-26
- ・ガンゴトリ山群とその周辺 稲田定重 98- 8
- ・ネパール登山規則改正さる 編集部 98- 16
- ・《未踏への誘い》(1)ガルワール・ヒマラヤ ナ
ンダ・デヴィ山群 稲田 定重 90- 14
- ・《 " 》(2)ガルワール・ヒマラヤ 東
部ガルワール 稲田 定重 91- 19
- ・《 " 》(3)ガルワール・ヒマラヤ カ
メット山群 稲田 定重 92- 16
- ・《 " 》(4)ガルワール・ヒマラヤ ガ
ンゴトリ山群 稲田 定重 93- 20
- ・《 " 》(5)パンジャブ・ヒマラヤ キ
ンナウル地域Ⅰ 稲田 定重 94- 17
- ・《 " 》(6)パンジャブ・ヒマラヤ キ
ンナウル地域Ⅱ 稲田 定重 95- 18
- ・《 " 》(7)パンジャブ・ヒマラヤ キ
ンナウル地域Ⅲ 稲田 定重 96- 18
- ・《 " 》(8)パンジャブ・ヒマラヤ キ
ンナウル地域Ⅳ 稲田 定重 97- 18
- ・《 " 》(9)シッキム・ヒマラヤ
稲田 定重 99- 18

- 《未踏への誘い》⑩キシュトワールⅠ
稲田 定重 100-22
- 《遠征学入門》
- PART-I 遠征学の領域と課題 阿部淳 91- 17
- " -Ⅱ 遠征登山の意志決定 " 92- 14
- " -Ⅲ 登山のデザイン その1
阿部 淳 93- 18
- " -Ⅳ 登山のデザイン その2 94- 15
" 94- 15
- " -Ⅴ 情報から計画立案へ
" 95- 16
- " -Ⅵ 現地でのあれこれ
西郡 光昭 96- 16
- " -Ⅶ 遠征準備あれこれ(1)
" 97- 16
- " -Ⅷ " (2)
" 98- 18
- " -Ⅸ " (3)
" 99- 16
- " -Ⅹ " (4) " 100-20
- 100号記念座談会「日本登山界とH A J」
池田常道、遠藤登、広島三朗、森田千里、稲田
定重、山森欣一 100-11

B. ガイド・紹介

- 旅行地紹介その1 エベレストの氷河を訪ねる
1- 2
- " その2 アンナプルナへの旅
1- 4
- 聖なる彫刻の話 大木滝次郎 2- 19
- カシミール(1) 一般的案内と標高4,000米の高
原ハイキングコース 鷲北 晃 6-101
- カシミール(3) 生活事情と旅行許可範囲
沖 允人 8-165
- カシミール(4) 登山について その1
沖 允人 9-180
- カシミール(5) 登山について その2
沖 允人 10-202
- カシミール(6) 登山について その3
沖 允人 11-240
- カシミール(8) -カシミール・ヒマラヤの日々
平林 寛也 16-443

- 旅行地紹介 その1 カトマンズ 6-104
- " その2 エベレストの氷河を訪ね
る 6-104
- 旅行地紹介 その3 アルナプルナへの旅
6-111
- ナムチェ方面高度表 6-107
- ポカラ方面高度表 6-113
- I.M.セルチャン氏のホテル、カトマンズにオ
ープン 9-177
- サブ・ザックでヒマラヤへ、カトマンズで登山
装備が借用可能 9-182
- 旅行地紹介 ポカラ班 シーカ方面
15-396
- " " セティ・コーラ
方面、ゴサインクンド方面 16-429
- 現地報告その1 アッサム便り 橋本 実
16-437
- " その2 ネパール・ハイキング
竹沢 昭治 16-438
- 旅行地紹介その1 ポカラ班 シーカ方面
21- 13
- " その2 エベレストの麓へ 21- 14
- 《ヒマラヤ情報》ビルマ入国最近の情報
大木滝次郎 22- 9
- 《 " 》シッキム入域について
沖 允人 22- 9
- 《 " 》カンチェンジュンガ方面の
トレッキング 大木滝次郎 23- 15
- 《 " 》中国への旅(上)
大木滝次郎 25- 8
- 《 " 》 " (下)
" 26- 13
- インド・ヒマラヤへの招待 M.S.コーリー 23- 11
- 日本アフガニスタン協会-紹介
沖 允人 23- 15
- モンゴルとゴビ砂漠 山本 克彦 25- 5
- トレッキングの範囲について
在ネパール大使よりの通達 27- 1
- クル谷周辺のトレッキング 29- 3
- パンジャブの山 1972年夏 大嶽藤一 29- 13
- ヒマラヤへのツーリズム M.S.コーリー 32- 2
- インドヒマラヤ登山-パンジャブとカシミール

を中心として—	M.S. コーリー	33- 5	その3 (財)日本パキスタン協会	61- 15
・インドヒマラヤの山々	K.P. シャルマ	33- 8	その4 アジア経済研究所	64- 17
・スワートのこのごろ	沖 允人	34- 2	その5 ネール登山学校	65- 15
・ヒマラヤ諸国のホテル紹介	パキスタン	34- 14	その6 日本ヒンズークシュ・カラコルム会議	66- 11
・アッサムガイド 青い丘とみどりの谷			その7 ダージリンのヒマラヤ登山学校	稲田 定重 67- 8
「A Trip to Assam」より	藤井毅訳	35- 4	その8 農林省熱帯農業研究センター	68- 13
・アッサムのこと	橋本 実	35- 9	・“バゴダの国”ービルマの一週間	沖 允人 59- 2
・ビルマ奥地のこと	“	35- 10	・インド旅行の手引	インド政府観光局発行の資料 61- 6
・ブータンのこと「入国手続」	沖允人	35- 11	・ヒマラヤへの誘い	Joginder Singh 64- 1
・今冬のネパールのトレッキングの苦言	沖 允人	35- 17	・《中央アジア・ガイド》中国領中央アジア	沖 允人 64- 11
・インドの避暑地マナリ(Manali)について	藤崎 和生	37- 14	・パキスタンの旅について	大木滝次郎 66- 16
・カシミール登山局のこと	沖 允人	38- 16	・アフガニスタンの旅について	鈴木 康志 66- 17
・キシトワール地方(Kishtwar)のトレッキング案内	沖 允人	39- 7	・シッキム	K.P. シャルマ 67- 13
・体験的デリー案内	“	40- 31	・スリナガル・レー間のレストハウスなど	68- 4
・“ (続)	“	41- 5	・ヒマラヤの料理(1)タルカリ(ネパールその1)	西田 純子 70- 12
・“ (続々)	“	44- 13	・“ (2) “ (ネパールその2)	“ 72- 10
・インドで長く暮すこと	“	40- 34	・“ (3)バナナブリ(ネパールその3)	“ 73- 10
・ラホール谷(LAHOUL VALLEY)ーSita			・シッキムとダージリン	藤井 毅 73- 4
World Travel 資料より	藤井好夫訳	41- 6	・ダージリンとシッキムの案内	Sitaworld Travel のパンフより 中村好江 訳 73- 5
・アッサム・シッキムのこのごろ	沖 允人	43- 10	・ダージリン・シッキムへのトレッキング日程の例	73- 6
・ザスカルへの夢	沖 允人	44- 8	・中央アジアの三都市	中西喜和男 74- 12
・“ (続)	“	54- 16	・ザスカル・ガイド	ペンドン峠(5,151m) F. フィダ 75- 19
・ガルワール山麓の名勝地	ーインド観光局パンフレットより	45- 1	・カシミール周辺のトレッキング	鈴木 康志 81- 4
・ミラム氷河情報	沖 允人	45- 9	・ザスカル山群のトレッキング	81- 7
・シムラを起点とする山岳地情報	大木滝次郎	45- 10	・ネパールのトレッキング手配について	85- 10
・インド・ヒマラヤへどうぞ	S. クマール (Kumar)	51- 3	・インドのトレッキング; 代表的コース	Youth Times May 13-26, 1977より 85- 12
・カシミールの夏	鈴木 康志	51- 5	・ガルワール・ヒマラヤ	ルプクンドへのトレッ
・秘境ラダックを訪ねる旅		51- 6		
・ダウラギリの雄姿を見る	第21号再掲	51- 7		
・アンナブルナ南面の旅	“	51- 8		
・エベレストのふもとへ	“	51- 9		
・AFGHANISTAN 旅行メモ		54- 15		
・《関係の機関・団体》				
その1 東洋文庫		57- 7		
その2 日本ネパール協会	稲田定重	58- 13		

キング日程 Sita World Travelのパンフより
 中村好江訳 88- 10
 ・H A J インフォメーション 100-18

C. 記 録

- ・秘境の峻峰に挑む ヒンズークシ踏査隊の記録
 北日本新聞の切抜きから
- ①計画と準備 橋本 広隊長 12-281
- ②出発 " 12-282
- ③周辺の自然 " 13-303
- ④風俗・習慣 " 13-304
- ⑤酒と女 " 13-305
- ⑥日本人 " 14-331
- ⑦コーイ・ダラン登頂 中蔵淳一隊員 15-372
- ⑧コーイ・ザック登頂 " 15-373
- ⑨コーイ・スパイダー登頂 " 16-434
- ⑩コーイ・ランダイ・ジャルガ登頂
 坪川賢三隊員 16-436
- ・ダウラギリからジュムラ 1972年ブレモンズ
 ーンの記録 米山 利雄 26- 6
- ・チリメコーラ源頭とゴサインクンド、トレッキ
 ング(1972.3) 岩水竜竜峰 28- 4
- ・パンジャブ・ヒマラヤ遠征隊概要報告
 滋賀岳連隊 29- 9
- ・カシミール・ヒマラヤ1971 空 昌昭 30- 7
- ・ " 1972 千葉良正 30- 14
- ・アフガニスタン・バラクラン谷などの旅 1972
 5~8 名城大学第3ヒマラヤ調査隊
 鈴木章一・柴田利雄 30- 19
- ・カンジェラルワ(6,660m)に初登頂、
 渡辺 文仁 31- 1
- ・3つの無名峰登頂とセントラ・ピーク試登
 HAAJ SWAT TOUR 34- 5
- ・ニルカント登頂 1961年インド隊
 沖 允人抄訳 37- 3
- ・SONAMARG THATWAS北面の試登
 久保 幸治 38- 7
- ・ラムジュン・ヒマール(6,993m)新ルートから
 登頂、山倉 洋一 39- 1
- ・ガルワール・ヒマラヤ《カランカ初登頂》
 田辺 郁夫 49- 1
- ・秘境ザスカール山群、ピズドン峠(4,810m)

- 日本ヒマラヤ山岳協会ザスカール踏査隊50- 2
- 《1975年日印合同カシミール・ヒマラヤ遠征隊
 ヌン峰》
- ・HAAJ .NK登山隊だより その1・その2
 山森副隊長 46- 12
- ・ " " その3
 山森副隊長 47- 19
- ・遠征実施にいたるまで
 事務局長 稲田定重 52- 1
- ・概要報告(1) 主として先発隊の行動
 隊長 西郡光昭 52- 2
- ・ " (2) 山森副隊長のヌン・クン通信から
 本隊行動記録 山森欣一 52- 6
- ・NUN(7,135m)アタック記 保坂昭恵 52- 10
- 《1975年HAAJ ガルワール・ヒマラヤ遠征隊》
- ・HAAJ・GH登山隊だより その1
 遠征隊事務局 46- 12
- ・ " その2
 稲田副隊長 47- 19
- ・ " その3：その4：その5
 清水隊長 48- 2
- ・遠征実施にいたるまで 副隊長 稲田定重
 52- 12
- ・P.6922,Ca.7000(P.6911),BAMCHU
 (6303)初登頂(GH隊行動の概要)
 稲田 定重 52- 13
- ・P.6992(Mt.RISHI PAHAR)峰登頂記
 館野 秀夫 52- 18
- ・Ca.7000(P.6911,SAF MINAL)初登頂
 今井 二郎 52- 19
- ・隊長 現地通信-6,992m峰全員征服に男泣き
 清水 澄 52- 21
- ・月明りのバムチュー(6,303m)
 リエゾン・オフィサー-B.P.Sフンダル中尉 52- 22
- ・バムチュー登頂のいきさつ 清水 澄 52- 23
- ・“ナイス・ガイ”われらのリエゾン・オフィサー
 清水 澄 52- 24
- ・初登頂の二峰に命名 53- 3
- 《H A J アフガニスタン登山隊1976》 55- 8
- ・H A J アフガニスタン隊だより その1 57- 11
- ・ " 現地だより(1) 58- 15
- ・ " " (2) 58- 15

- ナムチェグループ 谷野 計夫 10-190
- 堀内 立三 21- 2
- ・第3回ヒマラヤの旅・ネパール報告その2
アンナプルナ山群へのトレッキング(1)
浜 厳 11-221
 - ・第3回ヒマラヤの旅・ネパール報告その3
アンナプルナ山群へのトレッキング(2)
浜 厳 12-259
 - ・第3回ヒマラヤの旅・ネパール報告その4
アンナプルナ山群へのトレッキング(3)
浜 厳 13-292
 - ・第3回ヒマラヤの旅・ネパール報告その5
ヒマラヤの湖とラムジュン峰(上)
飯田 祐次 14-315
 - ・第3回ヒマラヤの旅・ネパール報告その6
ヒマラヤの湖とラムジュン峰(下)
飯田 祐次 15-359
 - ・ティリチ・ミール氷河への旅(1)
昭和44年7月2日～8月26日
津田 文夫 10-198
 - ・ティリチ・ミール氷河への旅(2)
津田 文夫 11-233
 - ・ティリチ・ミール氷河への旅(3)
津田 文夫 12-263
 - ・ティリチ・ミール氷河への旅(4)
津田 文夫 13-308
 - ・ティリチ・ミール氷河への旅(5)
津田 文夫 14-337
 - ・再びヒンズークシヘーコーイ・パルフ(5870米)
の登頂などー 金田 正樹 14-344
 - ・第5回ヒマラヤの旅 報告その1
ゴサインクンド班 堀内 立三 16-417
 - ・現地報告 その3 アンナプルナー周とランタ
ン・ヒマールへの旅 末吉 鉄也 16-439
 - ・インド・ネパールの旅 その1
資延 憲英 16-455
 - ・インド・ネパールの旅 その2
資延 憲英 18-510
 - ・インド・ネパールの旅 その3
資延 憲英 19-533
 - ・ヒマラヤ紀行 カブラル(スワート)での数日
昭和45年夏 久保田瑞枝 20- 18
 - ・ゴサインクンドへの旅ーシェルパと共にー
 - ・ヒマラヤ紀行 アンナプルナ南面の旅8mm映画
の解説より 浜 厳・清水 澄 21- 15
 - ・ネパール元旦 門倉 賢 22- 1
 - ・ヒマラヤ山中“おとぎの国” シッキム・アッ
サム(信濃毎日新聞より) 光島 督 22- 10
 - ・第7回ヒマラヤの旅 報告その1
ランタン・ヒマール踏査行速報
稲田 定重 23- 6
 - ・冬のインド旅行(1972年2月)
耕井 照和 24- 2
 - ・ルクラからロブジャまで 上田 安宜 26- 4
 - ・ゴザインクンドの思い出(東京集会での講演速
記) 小林 英見 27- 1
 - ・モディコーラのトレッキング(北海道ヒマラヤ
集会での講演速記) 今村 朋信 27- 2
 - ・ゴビ砂漠日記 砂漠・しん気楼・ゲルの生活
村山 栄子 28- 14
 - ・クル・マナリの思い出 林 茂樹 29- 5
 - ・快調的社会的侵略的道路脱税線走行 カト
マンズ・ボカラバスの旅 井関 扶 31- 4
 - ・ネパール 1973年8月 沖 允人 33- 10
 - ・ガルワル山麓の旅 “ 36- 4
 - ・シッキム・アッサムの旅(HAAJ.SIKKIM.
ASSAM TOURの記録1) 藤井 毅 36- 11
 - ・シッキム・アッサムの旅(HAAJ.SIKKIM.
ASSAM TOURの記録2) 藤井 毅 37- 7
 - ・まぼろしのコラホワイトトレッキング1973年3月
福井 浩之 36- 24
 - ・ハラムク周辺の山 内田 嘉弘 38- 11
 - ・ソナマルグよりパハルガムへ山田 正弘 38- 14
 - ・カシミール一人旅 浜口 徹 38- 15
 - ・カトマンズとスリナガル 黒沢 文代 38- 16
 - ・秘境ラダックを訪ねて 下野新聞連載
空 昌昭 38- 20
 - ①「地球に国境はない」、②灰色の岩と砂の世
界、③夢幻のカラコルム、④代々受継ぐ家族財
産、⑤豪せいな元王様の生活
 - ・フンザを訪ねて 上村 芳枝 38- 30
 - ・キシュトワール R.N.Pasvicha 39- 5
沖 允人訳
 - ・ラダックの印象 稲生由美子 39- 15

- ・ガルワル山麓・クマオンヒルの旅
藤条 好夫 40- 7
- ・ピンダリー氷河へのトレッキング
D.P.Pnadey 40- 9
沖 允人訳
- ・ベンジケントの遺跡で 堀内 立三 41- 4
- ・シッキム冬の旅 沖 允人 42- 5
- ・カシミールを旅行した思い出
今井千代子 44- 18
- ・ガルワル・ヘムクンド紀行 標高4,328mの湖
を訪ねて 沖 允人 46- 1
- ・“ネパールの旅”ランタン方面
林 さゆり 48- 14
- ・インドを旅して 保坂 昭憲 53- 5
- ・雲の上の村 山倉 洋一 53- 9
- ・ダージリンの印象 稲田 定重 53- 16
- ・サンダクブー紀行 館野 秀夫 54- 4
- ・ダウラ・ヒマールの旅(74.12~75.1)
清野 孝 54- 11
- ・クンプの旅<1975年> 片岡 善恵 55- 15
- ・世界の屋根に行く (1) 増田 秀穂 56- 16
- ・ ” (2) ” 57- 13
- ・IAA(国際芸術家協会)ネパール委員会訪
門記 藤江幾太郎 59- 7
- ・4度目のネパール50.10.20~11.30
” 60- 14
- ・<<ヒマラヤ紀行>>
カラコルムの山旅 (1) 河西 俊郎 61- 2
” (2) ” 62- 2
” (3) ” 63- 2
” (4) ” 64- 6
” (5) ” 66- 4
” (6) ” 67- 2
” (7) ” 68- 1
- ・<<中央アジア紀行>>
天山の麓へ (1) 沖 允人 62- 4
” (2) ” 63- 8
ブハラの秋 水野 治朗 64- 9
- ・マナスル通信 清水 澄 62- 9
- ・インドで感じたこと 松本香代子 65- 4
- ・スリガナル漫遊記 近藤 龍良 65- 16
- ・シンギ・カンリ周辺の氷河と峠
- 東北大学カラコルム遠征隊 古谷 信之 66- 12
- ・<<ヒマラヤ紀行>>
私のヒマラヤ (1) 小林 英見 69- 6
” (2) ” 70- 1
” (3) ” 71- 1
” (4) ” 72- 8
” (5) ” 75- 1
” (6) ” 76- 1
(ソナマルグの2日間)
” (7) ” 79- 13
(ランタンコーラトレッキング)
” (8) ” 81- 8
” (9) ” 83- 1
” (10) ” 85- 1
- ・世界の屋根への階段 インドエベレスト隊(1965)
ハイライト Cav. J. シン 71- 3
沖 允人訳
- ・カルカッタ・ダージリン旅の印象
松本香代子 73- 1
- ・<<モンゴル紀行>> (1)
北京~ウランバートル鉄道の旅
松岡 秀世 73- 14
- ・<< ” >> (2)
モンゴルの日々 ” 76- 12
- ・<<ラダック紀行>>1977年
マルカ川流域の村々を訪ねて
赤沢 正史 75- 12
- ・<<ベルシャ紀行>>1976年10月
耕井 照和 76- 7
- ・<< ” >>
新疆ウィングル地方の旅1977年夏
森本 達雄 79- 1
- ・インドネパール国境のトレッキング
伊東 満 76- 3
- ・タルコット峰(6,099m)登頂
桧山 隆 81- 1
- ・雪のゴラバニ紀行(1977.12~1978.1)
塩原 正一 85- 4
- ・大陸への散歩ーモンゴルの旅ー
田淵 卓也 88- 14
- ・HAJガルワール・ヒマラヤ遠征隊に参加して
Capatin Mukesh Chopra 88- 16

- ・ブータン西部山稜踏査 森田 千里 89- 8
- ・ビルマ紀行 八嶋 寛 89- 16
- ・ティリツォからマナン 和泉 拓良 90- 20
- ・《ザスカール紀行》
- ビズドン・ラを越えて(1) 中垣 淑子 92- 20
- " (2) " 93- 24
- " (3) " 94- 22

E. エッセイ・書評・物語

- ・百万円をもうけ損ねた話 大木滝次郎 1- 11
- ・H A A J とメッカ巡礼 近藤幾太郎 3- 38
- ・セルチャン氏一家のこと、ネパールのこと
- 藤江幾太郎 3- 44
- ・ネパールの酒 大木滝次郎 8-162
- ・ネパールと日本人のこと 前駐日ネパール大使
- B. R. バンダリー 9-168
- ・灼熱の国で、山、ヒマラヤを想う
- 資延 憲英 11-239
- ・EXP '70 の収穫 大木滝次郎 12-275
- ・追悼 深田久弥先生 17-468
- ・深田さんにつながる思い出 沼田 真 17-469
- ・深田さんを悼む 藤江幾太郎 17-470
- ・謙虚な山登りを教える 朝日新聞より
- 串田 孫一 17-471
- ・深田久弥先生と九山山房 神原 達 17-472
- ・深田久弥先生を悼む 高沢光光雄 17-473
- ・深田先生宅を訪ねる 沖 允人 17-474
- ・ヒマラヤ遠征のパイロットとしての深田先生
- 稲田 定重 17-479
- ・翔ける魂、深田先生とわたし
- 山里 寿男 17-480
- ・深田先生ご夫妻とわが家 沖 道子 17-481
- ・深田久弥先生をしのんで 新妻 徹 17-482
- ・カトマンズでの印象 増田 秀穂 18-504
- ・深田さんが亡くなられて 野上 成勇 19-561
- ・カトマンズ生活を省りみて 竹沢 昭治 20- 2
- ・ヒマラヤの花 小林 英見 22- 3
- ・打率十割 江上 康 22- 4
- ・ヒマラヤ物語シリーズ
- (1)ネパール 天国へ行ったユディスティラ
- 竹沢 昭治 訳
- 市村美知子 編 22- 30

- (2)ネパール ナムラ・ブッタ物語
- 竹沢 昭治 編 23- 33
- (3)カシミール えい／おお／
- S. L. サドウ
- 三浦 愛明 訳 24- 30
- (4)ネパール ニャーウリー、マリー、パチュート
- 竹沢 昭治 編 25- 32
- (5)カシミール でしゃばり者
- S. L. サドウ
- 三浦 愛明 訳 26- 30
- (6)ネパール 死に神に合ったダナタール
- 竹沢 昭治 編 27- 30
- (7)ネパール グルー・マッパ物語
- 竹沢 昭治 編 31- 23
- ・二度立ったエベレスト ナワン・ゴンブ 23- 14
- ・ヒマラヤ研究Ⅲ(第7回ヒマラヤの報告書)を
- 読んで 26- 26
- ・ヒマラヤを詠む 田尻 穂穂 28- 1
- ・私は再びネパールを訪ねる 折戸 正明 28- 2
- ・「ハスナイン博士」のこと 堀内 立三 36- 22
- ・ラムジュンのこと・インドのこと
- 佐々木 正 43- 18
- ・伊藤寿先生(岩手県)カラコルムで遭難
- ・追悼 岩水竜峰 48- 8
- ・伊藤先生逝く 植竹清孝 48- 9
- ・伊藤先生のこと 沖 道子 48- 9
- ・追悼 久保幸治 48- 10
- ・ある昔の思い出 高沢 忠 49- 16
- ・《ヒマラヤ閑話》を読んで 花の谷のこと
- 沖 允人 61- 14
- ・新聞記事からの冒険 65- 17
- ・エア・サイアム事件について 鈴木 康志 67- 17
- ・パミール山行を前にして 中西喜和男 69- 7
- ・ " (続) " 70- 13
- ・ヒマヤラの民話・伝説
- その1 雲南地方バー族の民話(1)《金竜報仇》
- 五十川倫義 訳
- 藤井 毅 編 72- 18
- その2 " (2)《小黃竜》
- " 73- 18
- その3 「焦れた米」の謎 「Link」誌
- 1976.5.30号より 沖 允人 訳 83- 19

その4 雲南地方ペー族の民話(3)「湖蝶泉」

五十川倫義 訳

藤井 毅 編 85- 17

・アルナーチャルの神話(天地創造譚)

生駒 芳子 訳 88- 6

・書評

「東海山岳第4号」 伊東 満 64- 19

セイロン島の密林遺跡(法政大学セイロン島密
林仏跡探査隊) 67- 15

民族探険の旅第3集インドヒマラヤ 68- 16

シルクロード地帯の自然の変遷 70-18

「別冊サイエンス 地球は生きている」を読ん
で 75- 20

「日本茶の伝来」 藤井 毅 89- 7

かくてこの道は星にまで(山嶺登高会カラコル
ム登山隊編) 92- 9

遙かなる詩・シルクロード(レコード)
93- 17

・「ヒマラヤ」よはばたけ 沖 允人 100-10

F. 連 載

《ヒマラヤ学入門》

(1)ヒマラヤ登山研究の指針 阿部 淳 14-353

(2)共同装備について 飯田 祐次 15-399

(3)インドの税関・空路インド經由ネパール入りの
場合 丸山 信治 15-400

(4)ネパール・ヒマラヤに関する文献資料
阿部 淳 15-403

(5)打合せ会 植竹 清孝 16-441

(6)トラベルローン利用法 小林美知子 19-568

(7)H A A J の利用 丸山 信次 20- 19

(8)ネパール語を勉強する人々のために
竹沢 昭治 20- 20

(9)個人装備としての精神と薬品
高沢 忠 21- 17

(10)その国の人とのつき合い方《シェルパ》
植竹 清孝 21- 18

(11)買い物 《ネパール》 " 21- 19

(12)ネパールの田舎の人とのつき合い方
丸山 信治 22- 12

(13)H A A J について 沖 允人 22-13

(14)ネパール・ヒマラヤに関する文献資料(補遺)

阿部 淳 22- 16

(15)写真のとり方 勝山 良三 23- 18

(16)資金のため方 増田 秀穂 24- 8

(17)高度の障害について 阿部 淳 24- 8

(18)お金を盗まれないために 宮原 進 24- 10

(19)トレッキングの装備 増田 秀穂 25- 11

(20)クレジット・カード 大木滝次郎 25- 12

(21)トレッキング中の保険について
林 茂樹 25- 13

(22)病気になったとき 阿部 淳 26- 16

(23)山岳保険《海外登山の場合》
花崎 洋 27- 9

(24)国際電報の打ち方 大木滝次郎 27- 11

(25)現地情報を得るには 阿部 淳 28- 16

(26)日本での通関について 大木滝次郎 31- 7

(27)エア・インディアについて " 31- 9

(28)ホテルの利用について " 31- 9

(29)国際電話のかけ方 渡部 信子 34- 17

(30)ヒマラヤ概説 大崎 正信 34- 20

(31)ヒマラヤの気候概説 " 35- 13

(32)手紙や小包の料金について 大木滝次郎 42- 10
(33の1)これだけは知っておきたいアジアの常
識、インド・パキスタン語

古賀 勝郎 43- 15

(33の2) " " 44- 12

(34)パスポートのこと 大木滝次郎 45- 14

(35)国際運転免許証 " 46- 16

(36)ネパールの国内航空 47- 13

(37)通関案内(1)
大蔵省関税局パンフレット 49- 9

(38)植物検疫について 54- 5

(39)パスポートの取得方法 鈴木 康志 54- 6

(40)英語の学び方(練習) 沖 允人 55- 18

(41)ヒマラヤ紀行などの自費出版したい方へ
" 56- 14

(42)ヒマラヤの国の取締法規など
鈴木 康志 57- 18

(43)旅券についての諸手続 鈴木 康志 58- 12

(44)パキスタン航空について 60- 5

(45)インスタント食品を試す 沖 允人 61- 5

(46)外国へお金を送るには 62- 16

(47)ヒマラヤ関係資料入手方法その1

	稲田 定重	67-	14
(48) ヒマラヤ関係資料入手方法その2			
	〃	68-	10
(49) ヒマラヤ関係資料入手方法その3			
	〃	69-	10
50) ヒマラヤ関係資料入手方法その4			
	〃	70-	8
51) 海外旅行の一般的注意	愛知県発行	72-	12
「楽しい海外旅行のためのミニガイド」			
52) 輸出用免税たばこ	山森 欣一	85-	11
53) 紀行文や登山記の書き方その1			
	大木滝次郎	88-	8
54) 〃 その2			
	〃	89-	13
《ヒマラヤ閑話》			
(1) クン登頂記録について(1)	水野 勉	43-	19
(2) 〃 (2)	〃	47-	11
(3) クン・その他	〃	48-	11
(4) ヒマラヤの意味	〃	53-	8
(5) ヒマラヤの商人たち	〃	55-	14
(6) ミニヤ・コンカ	〃	56-	11
(7) ヒマラヤのノーメンクレーチャー			
	〃	57-	9
(8) 花の谷(1)	〃	59-	8
(9) 〃 (2)	〃	61-	11
(10) 〃 (3)	〃	62-	15
(11) 「深田久弥旧蔵書目録」のこと			
	〃	64-	8
(12) イタリア隊によるカラコルム遠征文献			
	〃	66-	19
(13) シプトン追悼	〃	70-	10
(14) ヒマラヤの写真(1)	〃	71-	16
(15) 〃 (2)	〃	75-	9
(16) 〃 (3)	〃	83-	3
(17) 本の蒐集	〃	89-	14
(18) ダージリンの博物館	五百沢智也	90-	18
(19) アルナチャル・ブラディッシュのこと			
	水野 勉	91-	22
(20) ヒマラヤ飛行	五百沢智也	92-	18
(21) 古いガイド・ブック	水野 勉	93-	22
(22) 冬のカシミール	五百沢智也	94-	20
(23) ムスタンのこと	水野 勉	95-	20

24) 冬のクル谷とマラナ	五百沢智也	96-	20
25) 開けゆく中国側ヒマラヤ	水野 勉	97-	20
26) ヒル・ステーション	五百沢智也	98-	20
27) 学者としてのヘディン	水野 勉	99-	20
28)	五百沢智也	100-	24

＜ヒマラヤ放談＞

(1)	小西 政継	89-	1
(2)	白旗 史郎	90-	1
(3)	雁部 貞夫	91-	1
(4)	清水 清二	92-	1
(5)	藤江幾太郎	93-	1
(6)	五百沢智也	94-	1
(7)	池田 常道	95-	1
(8)	田村 俊介	96-	1
(9)	広島 三朗	97-	1
(10)	加藤 保男	98-	1
(11)	高橋 照	99-	1
(12)	野田 衛	100-	1

G その他

(a) 特別事業計画

- ◎ヒマラヤとシルクロード大作戦
- ◎創立15周年記念事業計画 55- 5
- ・その1 ビルマ雲南への夢 藤井 毅 57- 11
- ・その2 サセルカンリニラダックの名峰
沖 允人 58- 2
- ・その3 アルナチャルー 太陽の昇る山の国
東部ヒマラヤ研究会 59- 7
- ・その4,5 パミール計画、カンチ計画、サセル
計画など《現地事前調査報告》 60- 3
- ・インド通信 (1)、(2) 藤井 毅 62- 13
- ・ " (3)~(7) 63- 4
- ・ " (8) 64- 18
- ・ " (9)~(13) 65- 9
- ・ " (14)~(18) 67- 4
- ・第1回H&S準備委員会開催される 63- 13
- ・コムニズム峰登頂 64- 15
- ・着々と実現に近づく、経過、第2次案概要
67- 13
- ・H A J隊パミールへ向う 68- 5
- ・ジョギンダール、シン中佐の横顔 69- 13
- ・シルクロードの山と人(講演要旨) 69- 14

・H & S (ヒマラとシルクロード大作戦)		
計画・概要	77-	1
・H & S 調査隊計画	77-	2
・ヒマラヤとシルクロード大作戦	77-	3
・H & S プラン参加者申し合せ	77-	5
《H & S 計画》		
・ネパール・ヒマラヤリレートレッキング計画		
(そのⅠ、Ⅱ、Ⅲ)	77-	6
・シッキムトレッキング	77-	12
・ビルマ一週間の旅モデルプラン(1)~(6)	77-	13
・平野と丘陵、アッサム28日間の旅	77-	15
・ラマ教の世界とチベット文化	77-	16
・ブラーフマプトラ河流域調査計画	77-	17
・雄大なカンチェンジュンガの展望とネパールの休日	77-	18
・ガンジス川を下る	77-	19
・ヒマラヤの高山植物を求めて	77-	20
・インド亜大陸サイクリングの旅	77-	21
・アララット山(トルコ)とダマバンド山(イラン)	77-	21
・アフガニスタンの旅	77-	23
・モンゴルの旅	77-	24
・シルクロードの冬	77-	24
・H & S 計画の企画と実行について	77-	22
《H & S 計画》カンチェンジュンガ遠征計画		
	78-	1
・1980年カンチェンジュンガ遠征計画	78-	6
・1981年カンチェンジュンガ遠征隊	78-	7
《H & S 計画》プレカンチ計画	78-	9
カラコルム、パツラⅡ峰登山		
《H & S 計画》ヒマラヤ登山学校1978年	78-	15
ヒマラヤ登山学校 ガルワール隊	78-	16
〃 カシミール隊	78-	18
ヒマラヤ登山学校今後の計画(案)	78-	19
《H & S 計画》キャラバン計画、中央アジアとシルクロード一周	78-	19
・H & S 理事会議要旨	81-	18
(b) そ の 他		
・協会役員のプロフィール 会長のまき	2-	20
・〃 副会長のまき	11-	228
・ヒマラヤの旅を終えて 会長柴田金之助	3-	26
・羽田をあとに 柴田金之助	3-	27
・第1回ヒマラヤの旅参加者(24名)		
・〃 行動表	3-	28
・第1回ヒマラヤの旅、感想・反省・希望	3-	45
・第1回ヒマラヤの旅、インドへむかう(協会宛の便りから)	柴田金之助	4- 58
・ヒマラヤに山岳ホテル計画	新聞切抜	4- 76
・ヒマラヤへ	山と雪切抜	4- 76
・西ネパールの親日家インドラマン・セルチャン来日		5- 88
・インドラマン・セルチャン(I.M.Sherchan)氏の日程		5- 94
・ヒンズークシ踏査隊一出発ー		6- 96
・インドラマン・セルチャン氏帰国		6-119
・さよなら日本、ありがとう日本のみなさん	I.M.セルチャン	6-121
・ヒンズークシ踏査隊成果をあげて帰国		7-124
・アフガニスタン通信 その1~3		7-125
・新しい年には新しいことを	会長柴田金之助	8-144
・計報、故 梶本徳次郎		8-155
・協会カトマンズ事務所開設		8-158
・第3回ヒマラヤの旅、ネパール成功裡に終る		9-169
・カトマンズ・ボカラ・カプールの協会装備の貸出し	9-184,10-204,13-312,16-440,18-509	
・十万円台でヒマラヤへ 協会創立5周年記念行事計画(案)	9-186,10-217	
・東京事務所オープン		10-188
・ミール・サミールへむかって	中京山岳会隊	11-220
・ミール・サミール登頂(5,809米)	HAJJ 後援中京山岳会名城大学山岳部合同隊	12-256
・アフガニスタン便りその1~5		12-257
・キラノ君来日		12-290
・年間会費制度についてー46年度から		13-298
・ハスナイン博士を迎えてーカシミール・ヒマラヤの話ー		14-314
・北海道地方HAAJの皆さんへ	阿部 淳	14-323
・アンケート集計結果報告		14-325
・〃 (追加分)		14-369

- ・ヒマラヤ遠征を計画中の隊(1971年) 稲田 定重 14-350
- ・第5回ヒマラヤの旅(ネパール)帰国 15-358
- ・協会の体質改善 会長柴田金之助 16-416
- ・研究会々員募集 16-421
- ・最近の新聞より 16-422
- ・海外登山技術研究会(第9回)開催さる 16-448
- ・第2回ヒンズークシ会議も開催さる 16-448
- ・人、その意見 宮原 進 新聞切抜 16-460
- ・日本山岳協会に加盟なる 17-483
- ・ネパール卓球団歓送会開かる(名古屋) 18-500
- ・ヒマラヤトレッキング装備についてーヒマラヤバックA型、B型 岳人 287号より転載 沖 允人 18-524,19-549
- ・さよなら、ノキラン君 19-532
- ・東京都山岳連盟総会報告 19-560
- ・協会の意図するもの 会長柴田金之助 20- 1
- ・キラン・マン・セルチャン君、ネパールへ帰る 20- 5
- ・カシミール登山隊出発 20- 7
- ・故 深田久弥氏の全集出版を望む 滝川 清 20- 22
- ・カシミール・ヒマラヤ登山隊(1971年)帰国 21- 1
- ・計報、笹川広平氏・前田光雄氏 21- 26
- ・本協会々員坪川賢三氏の遭難について 橋本 広 21- 33
- ・ネパールあれこれ 竹沢 昭治 21- 35
- ・史上最大のヒマラヤ・ツアーHAAJ第7回ヒマラヤの旅出発 22- 2
- ・ネパールの青年がペンパルを求めています 藤江幾太郎 22- 3
- ・ヒンズークシ会議開催さる、ノ 22- 27
- ・ダージリンとマナリにHAAJ連絡所開設 23- 1
- ・正月のネパール・ヒマラヤの旅成功裡に終る 23- 2
- ・コーリ氏ヒマラヤ講演会盛大に行なわれる 23- 10
- ・ヒマラヤデボ装備の貸出しについて 23- 35
- ・第10回日山協海外登山研究会開催さる 23- 32
- ・前ネパール国王追悼式 新聞切抜 23- 32
- ・ヒマラヤ写真展盛大におこなわれる 24- 1
- ・カシミールの英文文献をお分けします 24- 14
- ・パンジャブ・ヒマラヤ登山隊出発 25- 3
- ・第1回東京都山岳連盟海外登山研究会報告 1972年7月1日 25- 30
- ・1973年日本ヒマラヤ山岳協会カンジロバ遠征隊計画 26- 1
- ・ミニ・ニュース ブータン国王死去(朝日新聞切抜) 26- 17
- ・17歳の国王に全権を与える(朝日新聞切抜) 27- 5
- ・HAAJカンジロバ遠征隊のご紹介 阿部 淳 27- 6
- ・1973年日本ヒマラヤ山岳協会カンジロバ遠征隊計画 27- 7
- ・1973年日本ヒマラヤ山岳協会遠征隊ニュース 28- 3
- ・HAAJカシミール登山ー報告とお礼 千葉 良正 28- 11
- ・1973年日本ヒマラヤ山岳協会カンジロバ遠征隊出発 29- 1
- ・ネパール・ヒマラヤ ラムジュン・ヒマール(6,983m)登山計画 32- 14
- ・1974年ポスト、ラムジュン・ヒマール(6,983m)遠征計画について 33- 12
- ・HAAJ KASHIMIR TOUR概要報告 38- 1
- ・1975年インドヒマラヤ遠征計画を進めるにあたって 事務局 40- 1
- ・ニューデリーにHAAJ事務所開設 40- 44
- ・アッサム研究会を作りませんか 藤井 毅 41- 14
- ・HAAJ会費の値上げについて 42- 12
- ・デリー・デボ、トレッキング装備(一般貸出し用) 42- 16
- ・1975年日本、インド合同カシミール遠征 42- 22
- ・HAAJガルワール・ヒマラヤ遠征隊計画 43- 7
- ・北海道地区・最近の話題 阿部 淳 43- 13
- ・カシミール・ラダック写真展開催さる 44- 20
- ・ " を見る 植竹 清孝 44- 21

- ・第4回日本ネパール研究学会開催
岩水 竜峰 47- 12
- ・H A A J 創立10周年を迎えて
会長柴田金之助 50- 1
- ・第7回ヒンズークシ・カラコルム会議開かれる
沖 允人 50- 10
- ・写真展「ネパールで出会った人たち」
植竹 清孝 53- 13
- ・N・K, G・H隊報告会開く 54- 3
- ・専務理事就任にあたって 岩水 竜峰 56- 1
- ・最近のカンジロバへの隊概要
「岩と雪」49号より 60- 4
- ・「ヒマラヤ山荘」オープン アッサム農業大ボ
ーラ博士を囲んで 沖 允人 61- 12
- ・第8回H・K・T会議開催さる 63- 14
- ・朝日ゼミナール「シルクロード」を受講して
鈴木 康志 67- 10
- ・日本大学ヌーリスタン踏査隊報告会
鈴木 康志 67- 12
- ・H A J アフガニスタン隊・その後
佐藤 優 67- 17
- ・「ヒマラヤの彼方へ」講演と映画の会、盛大に
各地で開く 71- 8
- ・《映画解説》秘境ヒマラヤ 71- 9
- ・ハラムク山群一周一現地だより
西村 和夫 72- 9
- ・H A J 北海道通信
北海道グループ世話人会 72- 15
- ・ヒゲ爺さんの夢ーバミールに旅立った前田清さ
ん レポーター村井 葵 74- 15
- ・東京都山岳連盟海外登山研究会報告
植竹 清孝 74- 19
- ・パンチェン・ラマ健在 政協第5期全国会議に
出席 79- 11
- ・アジア・エートス研究会参加報告
岩水 竜峰 79- 16
- ・《社団法人日本ヒマラヤ協会設立のために》
- ・その1 社団法人とは 稲田 定重 79- 26
- ・その2 法人格を持つことの意義
稲田 定重 81- 32
- ・その3 法人化の条件づくり
稲田 定重 83- 17
- ・中部地区小登山・報告 81- 18
- ・ヌン登頂報告会(名古屋) 85- 13
- ・社団法人日本ヒマラヤ協会設立にともなう財務
上の御協力依頼について(お願い) 85- 19
- ・日本ヒマラヤ協会々則の変更 85- 20
- ・専務理事就任にあたって “創造するヒマラヤ
へ” 稲田 定重 86- 27
- ・日本ヒマラヤ協会定款 86- 30
- ・“創造するヒマラヤ”をめざすH A Jの組織と
運営 89- 18
- ・転機にあたり全幅の御支援を
柴田金之助 93- 1
- ・森田勇造講演報告 91- 31
- ・1981年カンチェンジュンガ縦走計画について
93- 28
- ・1979ヒマラヤ登山学校 未知なる氷河の山=
キャシードラル6,400m 隊長山倉洋一 94- 10
- ・セミナートレッキング隊の準備順調 95- 24
- ・H A J 新事務所開設 97- 6
- ・都岳連海外登山研究会を開催 97- 6
- ・H A Jの会章決まる、ヒマラヤの空に……
会章のこと 斉藤 豊 97- 15
- ・カンチェンジュンガ隊富士山で合宿 98- 6
- ・1980年のインド・ヒマラヤ 99- 4
- ・カンチェンジュンガ縦走計画
H A J 特別事業委員会 99- 8
- ・「ヒマラヤ」主要目次(第1号~第10号)11-252
- ・ “ (第11号~第20号)19-571
- ・ “ (第21号~第50号)50- 11
- ・ “ (第51号~第60号)60- 17
- ・ “ (第61号~第70号)71- 17
- ・ “ (第71号~第80号)81- 33

H 会 務

(a) 総会・理事会

《総 会》

- ・43年度総会開かれる (S.43.12. 1) 3- 51
- ・昭和43年度会計報告 7-141
- ・ “ 監査報告(S.44. 7.25) 7-142
- ・昭和44年度総会報告 (S.44. 2.28)10-206
- ・ “ 45 “ (S.45. 7.25)12-288
- ・ “ 46 “ (S.46. 4. 8)18-523

- 47年度HAAJ 総会報告(S.47. 3.26) 24- 17
- 理事会および総会報告 (S.47. 9.23) 27- 19
- 昭和48年度総会報告 (S.48. 4.12) 30- 29
- " 49 " (S.49. 3.31) 36- 1
- 昭和50年度 " (S.50. 4.12) 43- 2
- 秋のHAAJ 総会・親睦登山報告
(S.50.10.10~12) 49- 12
- 総会報告 (S.51. 4. 4) 55- 3
- HAJ 昭和51年度総会報告
(S.52.11.27) 74- 20
- HAJ 昭和51年度一般会計報告および昭和52
年度予算 76- 10
- HAJ 昭和51年度事業報告ならびに52年度事
業計画 76- 16
- HAJ 昭和51年度特別会計報告 76- 17
- 日本ヒマラヤ協会(HAJ) 85- 20
総会概要報告
- 昭和53年度通常総会報告
(S.53.10.29) 86- 20
- 社団法人日本ヒマラヤ山岳協会設立報告
(S.53.10.29) 86- 28
- 昭和53年度通常会員総会報告
(S.54. 4. 1)91- 24
- 《理事会・その他》
- 理事会 沖 允人 (S.44. 3. 1) 3- 53
- 理事会報告 (S.44.10. 3) 8-163
- " (S.46. 9.23) 13-297
- " (S.46. 1.30) 15-363
- 第1回HAAJ インドヒマラヤ実行委員会
(要旨) (S.50. 7.12) 46- 13
- 第2回 " (S.50.10.11) 49- 15
- 第5回HAJ ヒマラヤ遠征委員会要旨
(S.51. 4. 4) 56- 15
- HAJ 理事会報告 沖 允人
(S.51.10. 9) 61- 19
- 第6回HAJ ヒマラヤ実行委員会報告
(S.51.10.10) 61- 19
- 東京理事会報告 (S.53. 2. 2) 78- 19
- 常任理事会報告 (S.53. 1.21) 79- 17
- 理事会報告 (S.53. 5. 7) 81- 13
- 第1回常務理事会報告 (S.53.12.23) 89- 21
- 理事会報告 (S.54. 3.31) 91- 30
- 昭和54年度評議員会報告
(S.54. 4. 1) 91- 30
- (b) 集会・研究会
- 《集会報告》
- (北海道地区)
- 盛会だったヒマラヤ映画会—札幌—
(S.44. 8.26) 7-139
- ヒマラヤを語る会 (S.45. 8.25) 12-262
- ヒマラヤ集会 (S.45.12.14) 15-368
- 第4回ヒマラヤ集会 (S.46. 3.16) 17-494
- 第5回 " (S.46. 5. 5) 19-559
- 第6回 " (S.46. 6.28) 21- 34
- 第7回 " (S.47. 2.25) 23- 37
- 第8回 " (S.47. 6.20) 25- 28
- 第9回 " (S.47. 9.12) 29- 28
- 第10回 " (S.47.12. 4) "
- 第11回 " (S.48. 1.27) "
- HHAJ カンジロバ遠征隊を送る会
(S.48. 3. 2) 30- 26
- 第13回ヒマラヤ集会 (S.48. 9.28) 33- 12
- ヒマラヤ集会 (S.49. 1.28) 35- 30
- " (S.49. 2.18) "
- " (S.52. 4.25) 72- 16
- " (S.52. 6. 6) 72- 17
- " (S.53. 2. 6) 83- 20
- " (S.53. 4. 1) "
- " (S.53. 4.10) "
- " (S.53. 6.26) "
- 札幌ヒマラヤ集会 (S.54. 1.21) 89- 20
- (東京地区)
- ヒマラヤを語る会 (S.45.10. 3) 13-299
- ヒマラヤ集会—カシミールとラダックの山々—
15-368
- ヒマラヤ集会 (S.46.12. 7) 22- 27
- 第1回定例ヒマラヤ集会(S.47. 2. 3) 23- 37
- 第2回 " (S.47. 3. 2) "
- 第3回 " (S.47. 4. 6) 24- 15
- 第4回 " (S.47. 5.11) 25- 25
- 第5回 " (S.47. 6. 1) "
- 第6回 " (S.47. 7. 6) "
- 第7回 " (S.47. 8. 2) 26- 20

- ・第8回定例ヒマラヤ集会(S.47. 9. 7) 27- 21
- ・第9回 " (S.47.10. 5) 27- 22
- ・第10回 " (S.47.11. 9) 28- 20
- ・第11回 " (S.47.12. 7) 28- 20
- ・第12回 " (S.48. 1.20) 29- 27
- ・第13回 " (S.48. 3. 9) 29- 28
- ・第15回 " (S.48. 4.11) 30- 26
- ・第16回 " (S.48. 5.13) 30- 28
- ・第17回 " (S.48. 6.13) 31- 20
- ・第18回 " (S.48. 7.11) "
- ・第21回 " (S.48.10.11) 33- 4
- ・ヒマラヤ集会(S.50. 4. 9) 43- 14
- ・ " (S.52. 4. 8) 68- 11
- ・ " (S.52. 6.23) 70- 15

金子民雄, Sushil Dahiya 講演

- ・ " (S.53. 2.19) 79- 9
- ベマ・ギャルボ講演
- ・ " (S.53.12. 4) 79- 17
- ・ " (S.53. 3.20) 81- 14
- ・ " (S.53. 4.20) "
- ・ " (S.53. 6.20) 83- 20
- ・ " (S.53. 7.20) "

(名古屋地区)

- ・第1回親睦登山報告(S.44.10.10~12)
- 増田 秀穂 8-145
- ・ヒマラヤを語る会(S.45. 9.23) 13-297
- ・ヒマラヤ集会(S.46. 3.26) 17-495
- ・ " (S.46.12. 4) 22- 27
- ・第1回定例ヒマラヤ集会(S.47. 5.18) 25- 26
- ・第2回 " (S.47. 6.15) 25- 27
- ・第3回 " (S.47. 7.13) "
- ・ヒマラヤ集会(S.47. 8.31) 26- 20
- ・ " (S.47.10.12) 27- 20
- ・ " (S.47.12.14) 28- 20
- ・ " (S.48. 1.25) 29- 27
- ・ " (S.48. 2. 8) "
- ・ " (S.48. 3. 8) 29- 28
- ・ " (S.48. 5.14) 30- 28
- ・ " (S.48. 6.22) 31- 20
- ・ " (S.48. 7.12) "
- ・ " (S.50. 6.13) 45- 16
- ・ " (S.50. 8. 8) 47- 28

- ・ヒマラヤ集会(S.50.11. 4) 50- 5
- ・ " (S.51. 4. 9) 56- 18
- ・ " (S.51. 4.25) "
- ・ " (S.51. 5.11) 57- 9
- ・ " (S.51. 6.11) 58- 14
- ・第2回親睦登山(S.51.7.3~5) 御岳一湧沢温泉
- より 沖 高行 59- 12
- ・ヒマラヤ集会(S.51. 7. 3~5) 59- 13
- ・ " (S.51. 7. 9) "
- ・ " (S.51.) 63- 14
- ・ " (S.52. 2. 4) 67- 13
- ・ " (S.52. 5. 7) 68- 11
- ・山行報告 五月の富士 佐藤 猛 70- 15
- ・ヒマラヤ集会(S.53. 2.17) 79- 7

岩水竜峰講演

- ・ " (S.52. 9. 9) 79- 17
- ・ " (S.52.12. 9) "
- ・ " (S.53. 3.10) "

(その他の地区)

- ・京都ヒマラヤ集会(S.46. 2. 4) 16-442
- ・ " (S.50. 6.28) 45- 16
- ・ " (S.53. 2.24) 79- 6

井ノ口泰淳講演

- ・大阪ヒマラヤ集会(S.44.11.26) 8-163
- ・ " (S.46. 3.28) 17-495
- ・ " (S.46.12.10) 22- 27
- ・ " (S.47.10.13) 27- 20
- ・ " (S.50. 3.30) 43- 14
- ・盛岡ヒマラヤ集会(S.46. 5. 1) 18-529
- ・秋田ヒマラヤ集会(S.46. 5. 2) 18-530
- ・富士山ヒマラヤ集会(S.46.9.25~26) 21- 7
- ・宇都宮ヒマラヤ集会(S.47.8.19~20) 27- 20
- ・山形ヒマラヤ集会第1回連絡会
- (S.47. 9.29) 27- 20
- ・第1回山形ヒマラヤ集会
- (S.47.11.4~5) 28- 20
- ・山形ヒマラヤ集会(S.54. 2.20) 90- 22
- ・九州ヒマラヤ集会(S.47.10.15) 27- 20
- ・ " (S.48. 9.24) 33- 4
- ・富山ヒマラヤ集会(S.48. 3.10) 30- 26
- ・ " (S.48. 9.15~16) 33- 1
- ・広島ヒマラヤ集会(S.48. 9.22) 33- 4

- HAAJ カシミール集会報告ーカシミール州観
光大臣をむかえてー 38- 2
- 長野ヒマラヤ集会 (S.49.10.12~13) 39- 3
- " (S.53.12. 3) 79- 17
- 八戸 " (S.49.11.30~12.1) 40- 36
- ハケ岳ヒマラヤ集会 (S.51.10.9~11) 61- 18
- 岐阜ヒマラヤ集会 (S.52. 4. 9) 68- 11
- " (S.52. 7. 8) 70- 14
- " (S.53.10.23) 79- 17
- 東北ヒマラヤ集会 (S.52.6.12~13) 70- 14
- 群馬 " (S.53.10.14) 85- 13
- 酒田 " (S.53.12.9~10) 89- 20
- 仙台 " (S.54. 1.20) "
- 福井 " (S.54. 1.20~21) "
- 近畿地区ヒマラヤ集会 (S.54.2.19) 90- 22
- " " (S.54.9.9) 96- 19
- 水戸ヒマラヤ集会 (S.54. 4. 8) 91- 31
- 福島 " (S.54. 5.26) 93- 26
- (ビスタリ・クラブ)
- <<Japan Bistari Club 発足>> 29- 38
- 日本ビスタリ・クラブ初会合
(S.48. 3.15) 30- 27
- H A J・日本ビスタリ・クラブ第2回集会
(S.48.10.6~7) 34- 30
- " " " 第3回集会
(S.49.6.8~9) 37- 23
- " " " 第4回集会
(S.50.5.3~5) 44- 4
- 第5回ビスタリ・クラブ集会
(S.51.5.29~30) 57- 16
- 第6回 " " (S.52.6.4~5) 70- 14
- 第7回 " " (S.53.6.3~4) 83- 18
- 第8回 " " (S.54.9.22~23) 97- 6
- <<研 究 会>>
- 第1回東北ヒマラヤ研究会報告
(S.46.6.5~6) 19-560
- 東北ヒマラヤ研究会を終えて
稲田 定重 20- 7
- 第2回東北ヒマラヤ研究会報告
(S.47.6.17~18) 25- 1
- 第3回東北ヒマラヤ研究会報告
(S.48.6.9~10) 31- 3
- 第4回東日本 " (S.49.6.2~3) 37- 1
- 第5回東日本ヒマラヤ研究会の終了にあたって
加賀 勝 45- 6
- 第6回 " (S.51.6.26~27) 58- 4
- 第7回 " (秋田) 概報
(S.52.6.25~26) 76- 18
- 第8回東日本ヒマラヤ研究会概況報告
(S.53.5.20~21) 83- 10
- 長野ヒマラヤ研究会 (S.47.9.23~24) 27- 17
- ネパール・ヒマラヤ研究集会報告 95- 7
- (1)札幌研究集会 (S.54. 8. 6)
- (2)仙台 " (S.54. 8. 8)
- (3)福岡 " (S.54. 8.11)
- (4)大阪 " (S.54. 8.12)
- (5)東京 " (S.54.8.8.14)
- 日本ヒマラヤ会議報告 (山形)
(S.54.12.8~9) 99- 14
- <<専門委員会>>
- Bhutan 研究会 News No 1 浜 徹 21- 34
- " " No 2 " 22- 3
- " " No 3 " 23- 19
- ブータン研究会開催さる (S.47.3.25) 24- 16
- Bhutan 研究会 News No 4~6 浜 徹 27- 8
- " " No 7 " 28- 25
- " " No 8 " 29- 16
- " " No 9~11 " 30- 28
- " " No 12 " 31- 12
- ブータン研究会から 矢野 郁雄 57- 6
- ブータン研究会報告ーソナム・D・ツェリン氏
を囲んで 81- 19
- ラダック研究会ーその後ー 23- 20
- " 24- 16
- " ーハスナイン博士を囲んでー
(S.48.1.14~15) 29- 20
- ラダック研究会 30- 21
- Expedition News No 1 稲田 定重 29- 18
- Expedition 研 親睦春山山行報告と感想

• Expedition 研 第1回研究会報告	29- 24	• Expedition 研究会だより	63- 13
稲田 定重	29- 24	• " "	66- 15
• " News No 2	" 30- 34	• チベット研究会入会のご案内	23- 20
• " News No 3	" 31- 15	• " "	24- 16
• HAAJの専門研究会 = 1 = Expedition 研究会	43- 13	• 研究会だより(ラダック研、チベット研、ブー タン研、ワヘン研)	26- 12
• Expeditio グループ研究会 体質改善、遠征 の方向などを決定	54- 14	• アッサム研究会だより	59- 16
• Expedition 研究会会員募集	56- 18	• 研究会だより-東部ヒマラヤ研究会	60- 2
• " "	57- 10	• " - 地図研究会	63- 13
		• " - "	66- 15
		• 専門委員会の動き	89- 21

いしくら印刷から 知的生活のすすめ

☐ 自費出版……………

俳句・短歌・詩・小説・随筆・文集・機関誌
論文集・旅行記・写真集・自叙伝・家訓
我家の記録・我人生・箴言集・語録・遺稿集
追悼文集・等々……

■ 自分の原稿が活字になった本を手にしたときの 感慨はすばらしい。

この知的生活の充実感をあなただけに……………

編集・レイアウト・写真撮影・補筆・造本企画に

いしくら印刷の長年つちかわれた

豊富な経験と作業知識がきっとお役にたちます。

〒364 北本市宮内3-246

いしくら印刷

☎0485-41-4026(代)

ファクシミリ

専用
番号

0485-41-4030

ヘディン探検紀行全集

全15巻／別巻2

深田久弥・長沢和俊
榎 一雄 監修

別巻 1・2 カラコルム探検史 (上) (下)

上巻 水野 勉訳／下巻 雁部貞夫訳

ヘディンの大著『南チベット』(全12巻)より最も興味深い第7巻の「カラコルム探検史」を別巻として全集に加えた。東西文化の通路に立ち塞がるカラコルムの山岳地帯について、これほど詳細な報告書は他に類をみない。ヒマラヤ研究者にとっても必読の書。(挿入地図24集)

A 5判(上巻) 384頁 ¥3800／(下巻) 380頁 ¥3800

白水社

東京神田小川町 3-24
振替口座東京 9-33228
電話 03-291 7811

ヒマラヤの高峰 全3巻 深田久弥著

望月達夫・諏訪多栄蔵 各 ¥5800
雁部貞夫編集

ヒマラヤ—その探検と登山の歴史—(第2版)

ケニス・メイスン著 ¥4000
田辺主計・望月達夫訳

ヒマラヤ—第三の極地

ギンター・オスカー・ディーレンフルト ¥3200
福田宏年訳

ヒマラヤ紀行

ジョセフ・ダルトン・フーカー著 薬師義美訳 ¥5800

処女峰アンナプルナ

最初の八〇〇〇米 モーリス・エルゾーグ著 ¥1400
峰登頂 近藤 等訳

ジャヌー北壁

小西政継著 ¥1800

小西政継 ロック・クライミングの本

¥1400

遥かなる高みへ!

ジャイ・ヒマラヤトレッキング

ぬけるような青空をバックにそびえる白き神々の座……
トレッキングの旅は私たちの心を洗ってくれるのです。

出発日 9月22日より毎週土曜日

コース ①エベレスト ②アンナプルナとタウラギリ ③ゴーク
④アンナプルナBC ⑤ゴサインクンドとランタン
⑥フリートレッキング(ご希望のコースをアレンジします)

10日間……¥242,000 15日間……¥258,000
17日間……¥282,000 22日間……¥305,000

ジャイヒマラヤハードトレッキング

●バルチャモ(6282m)
22日間 ¥398,000 出発日 10月6日
●カンガデ(6194m)
22日間 ¥398,000 出発日 12月23日
●デントピーク(5500m)
26日間 ¥408,000 出発日 12月27日
各定員6名。(カイト同行・商業旅行)

ネパールヒマラヤ・ライトエキスペディション

トレッキングで登れる18座の山々への小遠征隊のアレンジをいたします。79年ブレは6隊のお世話をしました。出発日、費用等はご希望に応じてご相談をうけたまわりますので当社までお問い合わせ下さい。なお、当社ではインドヒマラヤ登山隊の許可申請、現地手配等のアレンジもいたしております。

ブータンヒマラヤ・トレッキング

13日間 ¥495,000 出発日 10月6日
申込締切日 7月31日

・西アフリカと大サハラ

20日間 ¥895,000 12月29日発

・砂漠の国ラジャスタン、駱駝キャラバン

14日間 ¥365,000 12月23日発

・ラジャスタンの駱駝祭り

10日間 ¥328,000 11月 1日発

・シッキムとアッサム

14日間 ¥369,000 12月24日発

・秘境ブータン

9日間 ¥398,000 12月29日発

・黄金の三角地帯

7日間 ¥210,000 10月 6日発
11月 3日発

販売：(株)西遊旅行+(株)山と溪谷社
主催：(株)トラベル日本

運輸大臣登録旅行業第67号 取扱主任者 迫田健路



株式会社 西遊旅行

〒112・東京都文京区後楽 1-1-17

☎03-815・5391~3

(担当 石川、伊丹、沢上)

運輸大臣登録旅行業代理店業1976号

ヒマラヤへの装備



◎遠征隊の装備、相談にのります。



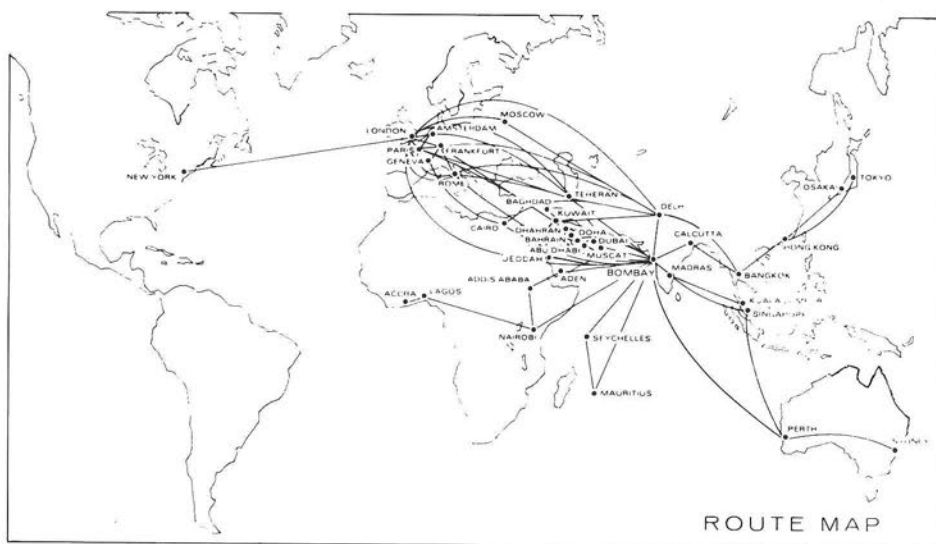
ICI 石井スポーツ



- 新宿登山本店 / 〒160東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(208)6601(代)
- 新宿西口店 / 〒160東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(346)0301
- 水道橋ハードギアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町2-8-14 ☎03(264)5575
- 水道橋ソフトウェアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町2-8-6 ☎03(264)8901
- 大宮店 / 〒330埼玉県大宮市宮町2-123 ☎0486(41)5707
- 高崎店 / 〒370群馬県高崎市新町105 ☎0273(27)2397
- ICI通販部 / 〒160東京都新宿区大久保2-19-10東和ビル内 ☎03(200)7219



AIR-INDIA ROUTE MAP



ヒマラヤとアルプスへの登山は、名古屋の耕井(HAJ会員)まで、お問い合わせ下さい。

名古屋●中村区名駅四丁目7 35ホテルニューナゴヤ 747号室 〒450☎(052) 583-0747

世界の40都市をネットする—
エア・インディア

東	京●千代田区有楽町日比谷パークビル	〒100☎(03) 214-7631
横	浜●中区常盤1-2 関内日本ビル	〒231☎(045) 651-2874
大	阪●東区備後町松豊ビル	〒541☎(06) 264-1787
神	戸●荻合区布引2-1-3 新布引ビル	〒651☎(078) 222-1919
福	岡●博多区博多駅前1-3-21 八重州ビル	〒812☎(092) 471-7172